

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2017

多賀城跡

宮城県多賀城跡調査研究所

序文

多賀城跡調査研究所は、昭和44年の開設以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を事業の両輪として継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を詳細に解明し、その成果に基づき、環境整備事業によって分かりやすく多賀城の特徴を現地に表現して県民に親しまれる史跡公園として活用されることをめざしています。

今年度の発掘調査事業は、第91次調査として、多賀城外郭南門から南に延びる南北大路の状況を確認し、近々に多賀城市が実施することとしている南門復元整備事業のためのデータを得ることを目的に田屋場地区の調査を行いました。調査地点は外郭南門が立地する丘陵が沖積地に降りる部分で、これまでの調査により丘陵部と沖積地での様相は明らかとなっていた南北大路の、両地形の変換点での様相を明らかにすることを調査の目的としました。

調査の結果、沖積地の2時期の南北大路の側溝と路面の一部を検出することができました。西側の側溝や丘陵部の南北大路の様子は明らかにはできませんでしたが、水流により路面にまで土が堆積する場合があったこと、新しい時期には側溝は何度も改修されていることなどが明らかとなりました。沖積地と丘陵部の境付近では側溝の底面に段差があることが分かるなど、南北大路の構造を理解する上でも貴重な成果を得ることができました。

環境整備事業は、今年から宮城県の総合計画である『宮城の将来ビジョン・震災復興・地方創生実施計画』の重点事業に位置づけられ、「多賀城跡創建1300年記念重点整備事業」として平成36年度の記念の年に向けて新たな事業を開始しました。政庁南面地区を対象とした第10次5ヶ年計画の3年目の事業としても位置づけられるもので、実施設計や基盤整備事業から動き始めました。今後も、管理団体である多賀城市とも連携しつつ着実に推進し、是非素晴らしいものに仕上げたいと考えております。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対しご支援を頂いた多くの方々に対し、所員一同感謝を申し上げます。

平成30年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 須田良平

目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第91次調査	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 調査の成果	5
3. 総括	26
III. 第90次調査以前の調査資料の追加報告	38
1. 第10次調査検出の外郭西辺柵木	38
(1) 第10次調査検出の柵木	38
(2) 多賀城跡出土西辺柵木の樹種	40
(3) 年輪酸素同位体比分析による多賀城跡西辺の柵木の年代決定	42
(4) 外郭西辺 SA1513の構築年代と樹種	46
2. 第86次調査区周辺(鴻ノ池)の珪藻分析	48
(1) 放射性炭素の年代測定	48
(2) 堆積物中の珪藻化石群集	50
3. 第88～90次調査出土の木製品	57
4. 第90次調査出土の文字資料	65
IV. 付章	79
1. 関連研究・普及活動	79
2. 組織と職員	84
3. 沿革と実績	85

調査要項

多賀城跡第91次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記のとおりである。

調査主体	宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 須田良平）
調査員	須田良平・吉野 武・白崎恵介・生田和宏・廣谷和也・高橋 透
調査期間	平成29年5月22日～10月30日
調査面積	約720㎡
調査参加者	市川菖暁・伊藤竜子・岡本敦子・川村善蔵・奥 清志・佐藤有佳利 鈴木和夫・鈴木幸夫（多賀城跡調査研究所臨時職員） 大堀秀人・木村 恒・鈴木秋平・館内魁生・山田翔平・王晗（東北大学大学院） 青木飛南子・川上知哉・渋川 駿・須賀永帰・武田 周・早川文弥（東北大学）
整理参加者	佐久間順子・高橋里枝（多賀城跡調査研究所臨時職員）

例 言

1. 本書は、平成 29 年度に実施した多賀城跡の第 91 次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、関連研究事業、普及活動の概要等、及び平成 28 年度以前に実施した多賀城跡発掘調査の追加報告を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業は多賀城跡調査研究委員会での審議と承認のもとに行っている(第 1 表)。
3. 測量原点は政庁正殿跡身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ 1° 04′ 東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標値は東日本大震災後(平成 24 年)に実施した再測量の成果から以下のとおりである。
 正殿 世界測地系 X 座標: -187968.3530m、Y 座標: 13560.4850m、標高: 32.964m
 南門 世界測地系 X 座標: -188037.4930m、Y 座標: 13559.3150m、標高: 29.799m
4. 本書における遺構の位置の表記は、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離(m)で示している。
 例: W5 = 原点から西に 5m、S3 = 原点から南に 3m
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 11 版』日本色研事業株式会社(1996 年)にもとづく。
6. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
7. 当研究所の刊行物は『多賀城跡 政庁跡 本文編』を『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 図録編』を『図録編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』を『補遺編』、『多賀城跡 外郭跡 I-南門地区-』を『外郭 I』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報 2010』などと記し、複数の年報の場合は『年報 1983・2006』、『年報 2011～2014』などと記す。
8. 本調査で得た資料は、宮城県教育委員会で保管している。
9. 本書の一部は『第 91 次調査現地説明会資料』、『平成 29 年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第 44 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』等で紹介しているが、本書の内容が優先する。
10. 本書のうち、第 10 次調査検出の柵木に係わる樹種同定は国立歴史民俗博物館の箱崎真隆氏ほか(Ⅲの 1(2))、年輪酸素同位体比分析による年代測定は福島大学の木村勝彦氏ほか(Ⅲの 1(3))、第 86 次調査の珪藻分析は東北大学名誉教授の鈴木三男氏の依頼で放射性炭素の年代測定は(株)パレオ・ラボの AMS 年代測定グループ(Ⅲの 2(1))、堆積物中の珪藻化石群集は(株)パレオ・ラボの野口真利江氏(Ⅲの 2(2))、第 89・90 次の樹種同定(Ⅲの 3の附表)は東北大学名誉教授の鈴木三男氏から、それぞれ玉稿をいただいた。他は所員で討議と検討を行い、IおよびⅢの 1(1)・(4)と 4を吉野 武、Ⅱを生田和宏・高橋 透、Ⅲの 3を生田、Ⅳを須田良平と白崎恵介、吉野が執筆し、全体は生田が編集した。

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真: 南北大路を南より撮影】

氏 名	所 属	専門分野
委員長 佐藤 信	東京大学大学院教授	古代史学
副委員長 阿子島 香	東北大学大学院教授	考古学
委員 小野 健吉	和歌山大学教授	庭園史学
委員 熊谷 公男	東北学院大学名誉教授	古代史学
委員 黒田 乃生	筑波大学教授	造園学
委員 櫻井 一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委員 鈴木 三男	東北大学名誉教授	植物学
委員 藤井 恵介	東京大学大学院教授	建築史学
委員 古瀬奈津子	お茶の水女子大学基幹研究院教授	古代史学
委員 松村 恵司	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	考古学

第 1 表 多賀城跡調査研究委員会委員(任期: 平成 29 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日)

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認のもとで5ヵ年計画を立案して行っている。近年は東日本大震災による県内の復旧事業を優先し、事業の内容を一部変更しており、今年度は外郭施設の調査資料の蓄積を目的とした多賀城跡発掘調査第10次5ヵ年計画の4年次目の事業として第91次調査、政庁南面地区を本格的に整備する環境整備第10次5ヵ年計画3年次目の事業として同地区南半の実施設計と基盤整備を実施した。

このうち第91次調査は、当初は五万崎地区で第I期の外郭南辺を調査する計画であったが(第2表a)、多賀城市が計画する多賀城南門の復元に伴って整備される第II期南門周辺の調査が急務であることから、多賀城跡調査研究委員会での審議と承認を経て、田屋場地区の南北大路を調査することに変更し、五万崎地区の調査は第92次調査以降に繰り下げることにした(同表b)。以下、本書では主に第91次調査の概要を記すとともに、昨年度の第90次調査及びそれ以前の調査(第10・86～90次)の追加報告を収載する。また、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

年 度	次 数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成26年	87次	外郭南辺(田屋場・坂下地区)	910 m ²	外郭南門・南辺の検討
平成27年	88次	外郭南辺東半(立石地区)	390 m ²	外郭南辺の検討
	89次	政庁南大路(城前地区)	280 m ²	政庁南大路の補足調査
平成28年	90次	外郭南辺西半(坂下地区)	430 m ²	第I期外郭南辺の検討
平成29年	91次	外郭西辺(五万崎地区)	1000 m ²	第I期外郭南辺の検討
平成30年	92次	外郭西辺(五万崎・西久保地区)	1000 m ²	外郭西辺の検討

第2表 a 多賀城跡発掘調査第10次5ヶ年計画(変更前。平成26～28年度は実績)

年 度	次 数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成26年	87次	外郭南辺(田屋場・坂下地区)	910 m ²	外郭南門・南辺の検討
平成27年	88次	外郭南辺東半(立石地区)	390 m ²	外郭南辺の検討
	89次	政庁南大路(城前地区)	280 m ²	政庁南大路の補足調査
平成28年	90次	外郭南辺西半(坂下地区)	430 m ²	第I期外郭南辺の検討
平成29年	91次	外郭南門(田屋場地区)	720 m ²	南北大路の検討
平成30年	92次	外郭南辺(五万崎地区)	1000 m ²	第I期外郭南辺の検討

第2表 b 多賀城跡発掘調査第10次5ヶ年計画(変更後。平成26～29年度は実績)

Ⅱ. 第 91 次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 調査の目的

外郭南門地区については、多賀城市が南門の建物復元と南北大路を復元的に整備することとしている。そして一昨年度に外郭南門地区の丘陵から沖積地へ下る場所の公有地化を契機として、第 10 次 5 ヵ年計画の計画を一部変更し、その 4 年次目となる今年度に、第 91 次調査として南北大路の調査を実施した。

隣接する南北大路の過去の調査例には、①調査地南側の宮城県教育委員会による県道「泉-塩釜線」建設に先立つ調査（宮城県教育委員会 2001）と、②約 60m 北側の第 80 次調査（『年報 2008』）がある。

①の調査では、当初は路幅約 18m であったが、後に約 23m に拡幅されているとし、前者は 8 世紀中葉から末、後者は 8 世紀末から 10 世紀後葉と推定している。一方、②の調査では、南北大路は a・b の 2 時期の変遷があり、路幅が約 18m から 23～27m に拡幅するとし、年代は、南北大路、政庁南大路、外郭南門の位置や主軸方位の検討から、a から b への改修の上限は政庁第Ⅲ-2 期、終末は 10 世紀後葉頃としている。また、a は地山を削り込んだ後に盛土し、b は a の東西両側の壁を削り出して路幅を広げ、さらに盛土で路面を嵩上げしたと報告している。

そこで、本調査では上記の①・②調査区の間にあたり、第Ⅱ期南門跡の立地する丘陵部から南の沖積地へと下る場所の環境整備に資する資料を得ることを目的として、南北大路の延長の確認及び規模・構造と変遷を把握することとした。

(2) 調査の経過

田屋場地区と調査区の位置：田屋場地区は政庁の南に位置し、城外南西の市川橋から多賀城碑の北側を通じて塩釜に至る市道新田浮島線と県道泉-塩釜線に挟まれた地区で、第Ⅱ期南門が立地する北東から南西に延びる丘陵とその南に広がる沖積地にあたる。

今回の調査は、その丘陵の末端と沖積地を南北に縦断するとみられる南北大路が北側の丘陵部に上がる場所を対象とし、T1～3 の調査区を設定した。政庁正殿跡の多賀城原点からは南に 500～540m、西に 20m 前後、東に 15m 前後の場所に位置する。

調査の経過と方法：調査は 5 月 22 日から重機で T1 北部・T2・T3 の順に掘削を開始した。まず、T1 北部・T2 について、ともに近現代の表土・盛土（第Ⅰ層）の直下で地山である岩盤（第Ⅴ層）が露出した。5 月 30 日から行った精査の結果、南北大路の東西両側溝及び路面は近現代の地形改変により大きく削平されて残存しておらず、時期不明の溝 3 と土壌 1 を確認したのみであった。そこで、引き続き上記の遺構を一部掘り下げた後、写真撮影・図面作成による記録作業を行い、6 月 26 日までに空撮以外の作業を完了した。一方、T3 について、表土を重機・人力で除去し、6 月 19 日に南北大路東側溝やそれより新しい東西・南北方向の自然流路跡、灰白色火山灰が自然堆積する土壌な

どを古代の堆積層（第Ⅲb層）上面で確認した。そこでさらに、東側溝の規模や堆積状況、西側溝・路面の残存状況等を把握するため、6月20日から南半部に東西方向のトレンチを設けて、7月6日に第Ⅲb層または第Ⅳb層まで到達した。T3南壁断面を精査した結果、西側溝の可能性のあるSX3356-5層を確認したが、路面は東西・南北方向の自然流路跡で大きく壊され、残存していなかったため、トレンチを北側に拡張した。その結果、路面とSX3356-5層の北延長部を確認した。

一方、東側溝と路面の沖積地から丘陵部への取り付けを確認するため、7月25日から重機でT1東部を南へ拡張した。8月2日から行った精査の結果、第Ⅲa・b、Ⅳb、Ⅴ層上面で東側溝を確認したが、路面は残存していなかった。

また、西側溝の可能性のあるSX3356-5層、自然流路跡、路面の識別を確実にするため、9月15日から人力でT3を北に拡張した。その結果、西側溝の可能性のあるSX3356-5層は自然流路跡の堆積土の最下層であることを確認した。そこでさらに沖積地から丘陵部への路面の取り付けを確認するため、10月26日から重機でT3東部を北へさらに拡張した。精査の結果、東西方向の自然流路を発見したのみで、路面は確認できなかった。検出した遺構はデジタルカメラで撮影し、縮尺1/20の平・断面図を作成した。図面の作成にあたっては城前地区に埋設された「南門原点」「南門Y」の基準点を用いた。遺構番号は3337番から付し、10月27日には遺構の精査と記録を終了した。調査区の埋め戻しは10月26日から行い、調査の一切が終了したのは10月30日である。

また、調査期間中の9月5・6日には多賀城跡調査研究委員会を開催して調査成果に関する指導と承認を受けた。それを踏まえて10月5日に調査成果を報道機関に公表し、10月7日には現地説明会を開催した。説明会の当日は雨天にもかかわらず、約70名の参加者を迎えて発見した遺構と遺物について説明を行った。さらに、調査終了後の12月10日には平成29年度宮城県遺跡調査成果発表会、平成30年2月17日には第44回古代城柵官衙遺跡検討会でも成果の概要を報告している。



T3 調査状況



現地説明会の様子

図版2 調査・一般公開の状況

2. 調査の成果

(1) 基本層序(図版 1～11)

調査区は、第Ⅱ期南門が立地する北東から南西に延びる丘陵とその南に広がる沖積地にかけて T 1～3 を設定した。調査区付近の地形は、丘陵部の北西から沖積地の南東または南にかけて傾斜する。詳細にみると、丘陵は、厚さ 0.1～1.5m の表土・造成土・耕作土(第Ⅰ層)直下が地山(第Ⅴ層)となっており、現代の切土や盛土による地形改変が大きい。古代の遺構検出面の標高は 3.2～4.5m で、旧地形は北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。一方、南側の沖積地は、厚さ 0.9～1.3m の表土・造成土・耕作土(第Ⅰ層)直下が堆積層(第Ⅱ～Ⅳ層)となっており、特に現代の盛土が 0.5～0.7m と厚い。古代の遺構検出面の標高は 2.4～3.1m で、旧地形は北東から南西または北から南に向かって緩やかに傾斜する。堆積土は造成土(第Ⅰa層)を除くとすべて自然堆積層で、全 5 層に大別できた。古代以降の遺構検出面は第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳa 層と第Ⅴ層の地山層で大半が第Ⅲ・Ⅴ層である。第Ⅱ層は T 2 中央南端付近にのみ残存する。T 1 東部を南北に延びる南北大路東側溝の北端付近や T 3 北端付近の丘陵裾を境として、第Ⅴ層は北側、第Ⅲ・Ⅳ層は南側に分布する。以下、各層の特徴を示す。

【第Ⅰ層】現代の表土・造成土・耕作土で a～c に細分できる。厚さは 0.1～1.5m である。a 層は表土・造成土、b 層は暗緑灰色(5G3/1)粘土・シルトの旧表土、c 層は褐色(10YR4/4)粘土の耕作土とみられる。

【第Ⅱ層】灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトからなる古代以降の堆積層。

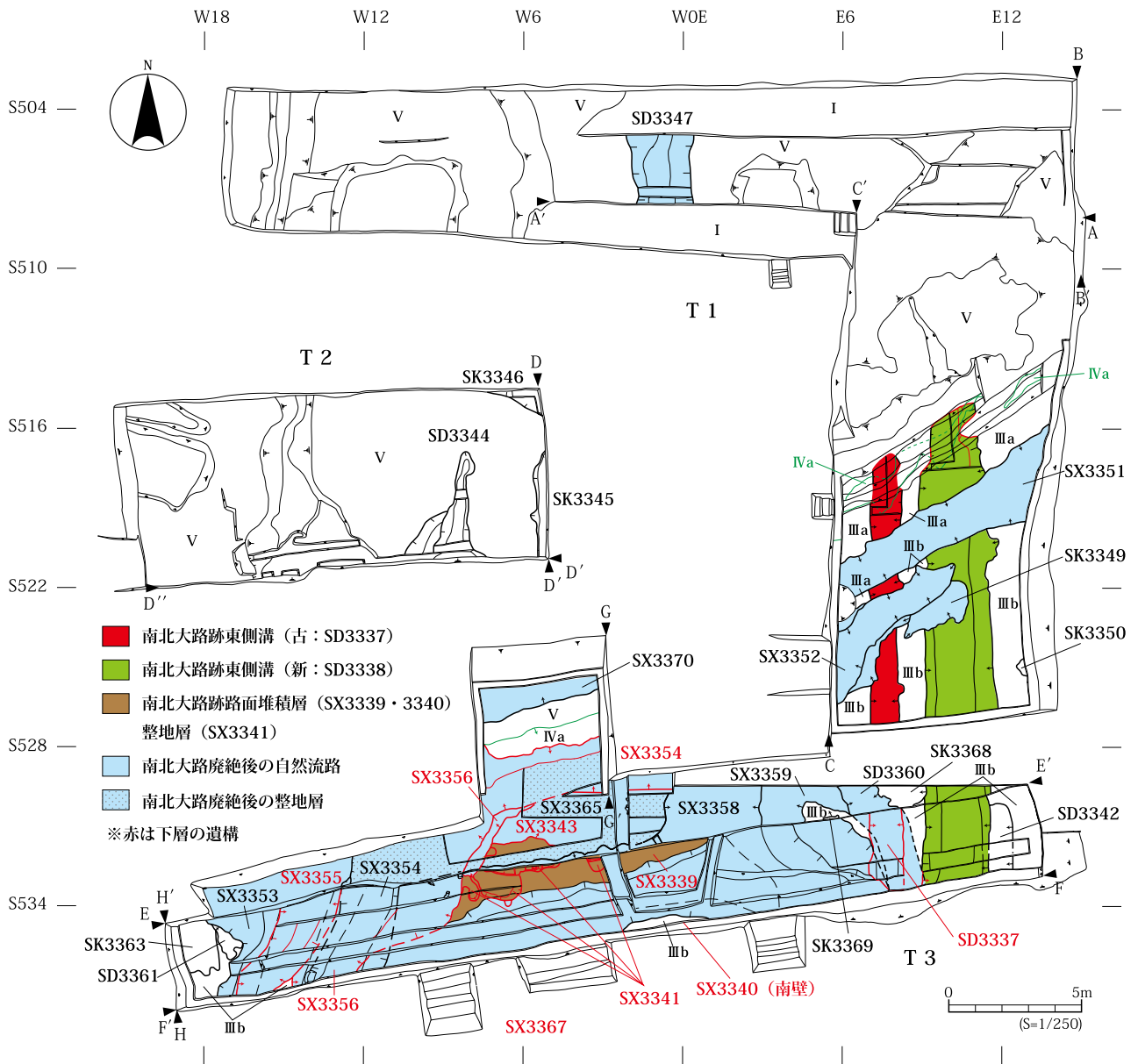
【第Ⅲ層】古代の堆積層で a・b に細分できる。a 層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土、b 層は暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルトからなる水成堆積層である。

【第Ⅳ層】古墳時代の遺物片を少量含む黒色シルト・粘土層で a・b に細分できる。a 層は南北大路東側溝の北端付近にみられる黒色(10YR2/2)砂質シルト、b 層は T 3 南壁でみられるオリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土である。

【第Ⅴ層】にぶい黄橙色(10YR7/2)礫の岩盤からなる地山層。

(2) 発見遺構と出土遺物

遺構のほとんどは、T 1 東部南や T 3 の沖積地で検出した。南北大路との新旧関係、遺構堆積土の状況から「A 南北大路とそれ以前の遺構」「B 南北大路より新しい遺構」「C 南北大路との関係が不明な遺構」に大別できる。したがって、以下では A～C の順に遺構の概要を記述する。そして最後に「D 基本層序等の出土遺物」は、特筆すべき資料に限って取り上げる。



図版3 調査区平面図

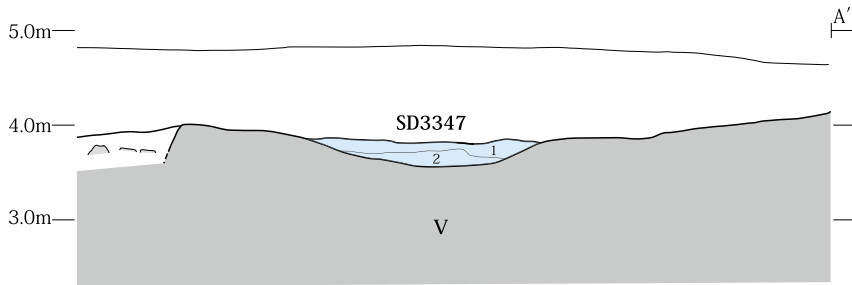
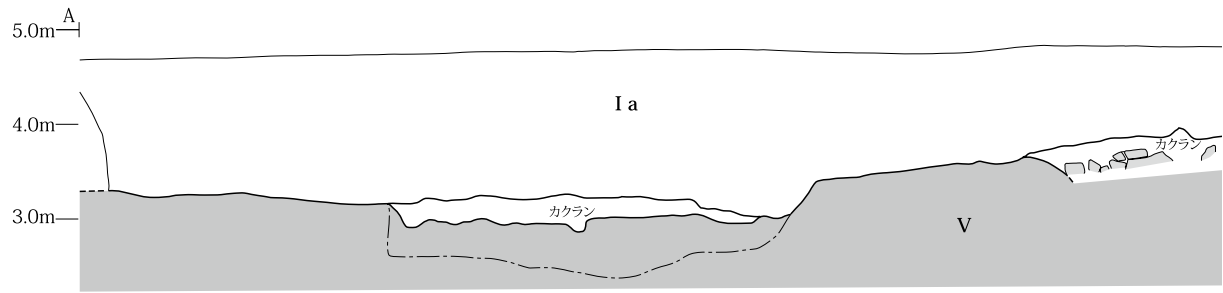


調査区遠景 (南西から)

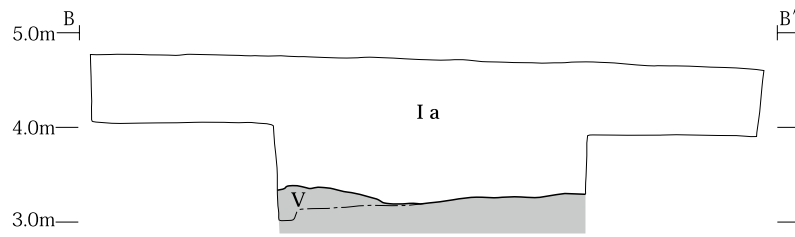


調査区近景 (上が北)

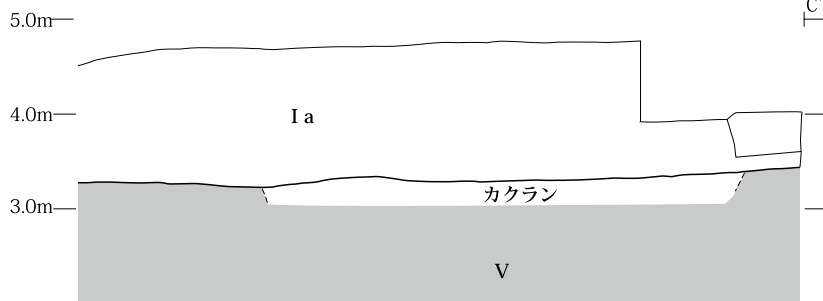
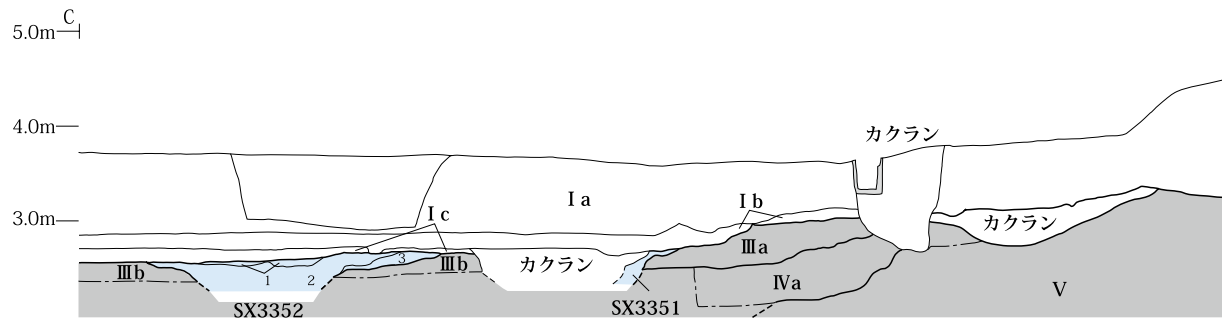
図版4 調査区遠景・近景



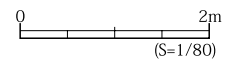
T 1 南壁



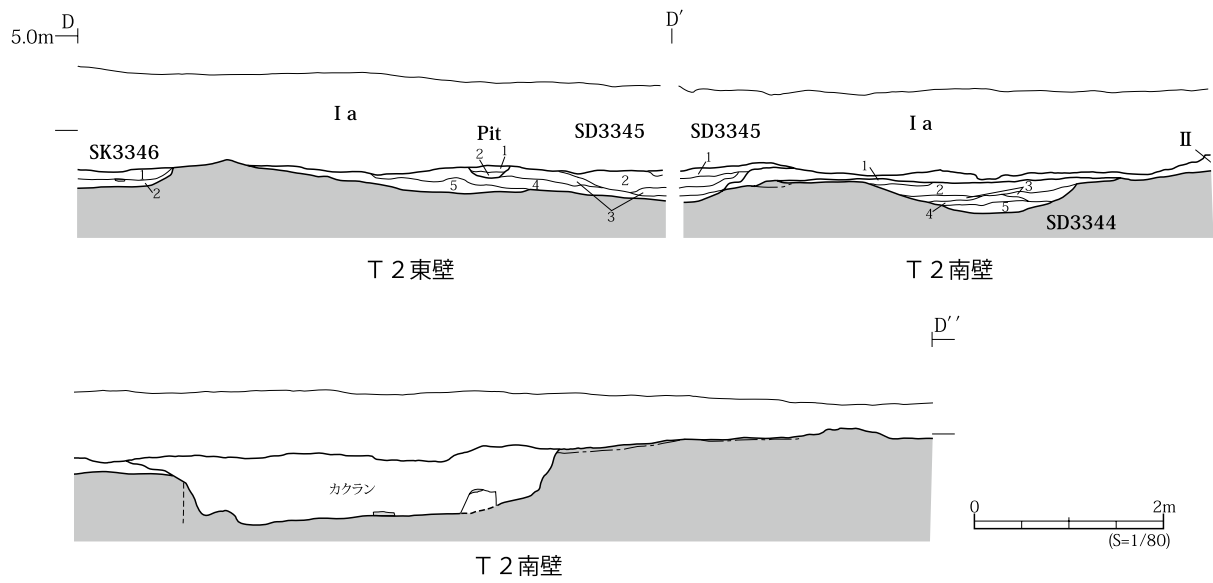
T 1 東壁



T 1 西壁



図版5 T 1 南壁・西壁・東壁断面図



図版6 T 2 東壁・南壁断面図



1 T 1 北部全景 (東から)



2 T 1 北部南壁断面 (北東から)



3 T 2 全景 (北東から)



4 T 2 西壁断面 (西から)

図版7 T 1 北部・T 2



1 T3 東部北壁 (南東から)



2 T3 東部北壁 (南西から)

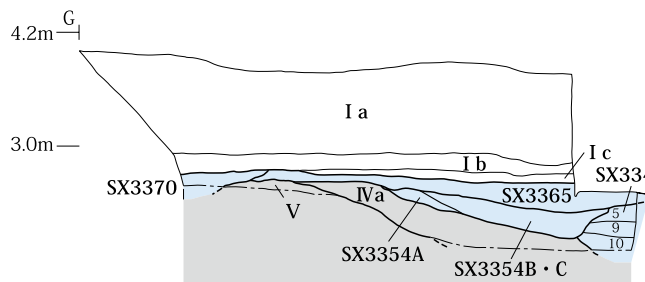


3 T3 西部南壁 (北西から)

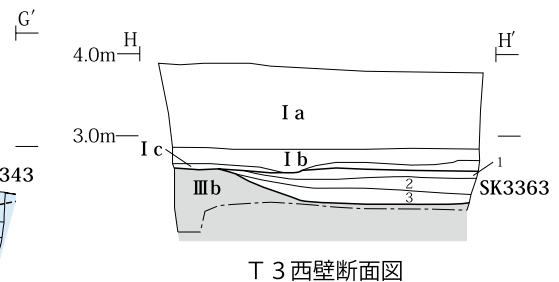


4 T3 東部南壁 (北東から)

図版9 T3 北壁・南壁



T3 北部東壁断面図



T3 西壁断面図

図版10 T3 西壁・北部東壁断面図



1 T3 北部東壁 (南西から)



2 T3 西壁 (東から)

図版11 T3 西壁・北部東壁

A 南北大路とそれ以前の遺構

【SX3000 南北大路跡】(図版8・12～18)

外郭南門から政庁中軸線のほぼ延長上を南に延びる道路跡である。大路に伴う遺構にはT 1 南東からT 3 東にかけてSD3337・3338 東側溝、T 3 中央にSX3341 整地層、SX3339・3340 路面堆積層がある。一方、西側溝は後述する大路より新しい自然流路跡や現代の地形改変で全て壊されており、残存していなかった。ただし隣接地の調査例では、大路は大別2時期の変遷があり、約18mであった路幅が約24mに拡幅されたと報告されている(『年報2008』、宮城県教育委員会2001)。拡幅前を大路A、拡幅後を大路Bとし、その成果を援用すると、SD3337が大路A、SD3338が大路Bの東側溝と考えられる。一方、SX3341 整地層、SX3339・3340 路面堆積層は、SD3337、SD3338との新旧関係が不明であることから、A・Bへの所属は把握できなかった。そこで以下、大路A、大路B、SX3341 整地層、SX3339・3340 路面堆積層の順に述べる。

〔大路A〕(図版8・12～14)

南北方向の道路跡でSD3337 東側溝を検出した。SD3337 東側溝は、第Ⅲ～Ⅴ層上面で検出した南北方向の溝である。SK3368 土壌、SX3351・3352・3359・3360 自然流路跡より古い。検出した長さは17.0mで、方向は南北の発掘基準線とほぼ同じである。規模は上幅が1.2m、下幅が0.8m、深さが0.5mで、断面形は逆台形状を呈す。底面の傾斜は南の低地から北の丘陵裾に向かって緩やかに上がっており、北端では急に立ち上がる。堆積土は4層に細分できる。そのうち1・3・4層は黒色土ブロック・地山ブロックを多く含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質シルトで埋め戻されている。2層のにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトは、埋め戻し中に流入した水成堆積土とみられる。遺物は土師器の壺・甕が出土している。

〔大路B〕(図版8・12～14)

南北方向の道路跡でSD3338 東側溝を検出した。SD3338 東側溝は、第Ⅲ～Ⅴ層上面で検出した南北方向の溝である。SX3351・3352・SK3349・3360より古い。検出した長さは18.0mで、方向は南北の発掘基準線とほぼ同じである。側溝は3回改修されており、古い順からA～Dに大別できる。

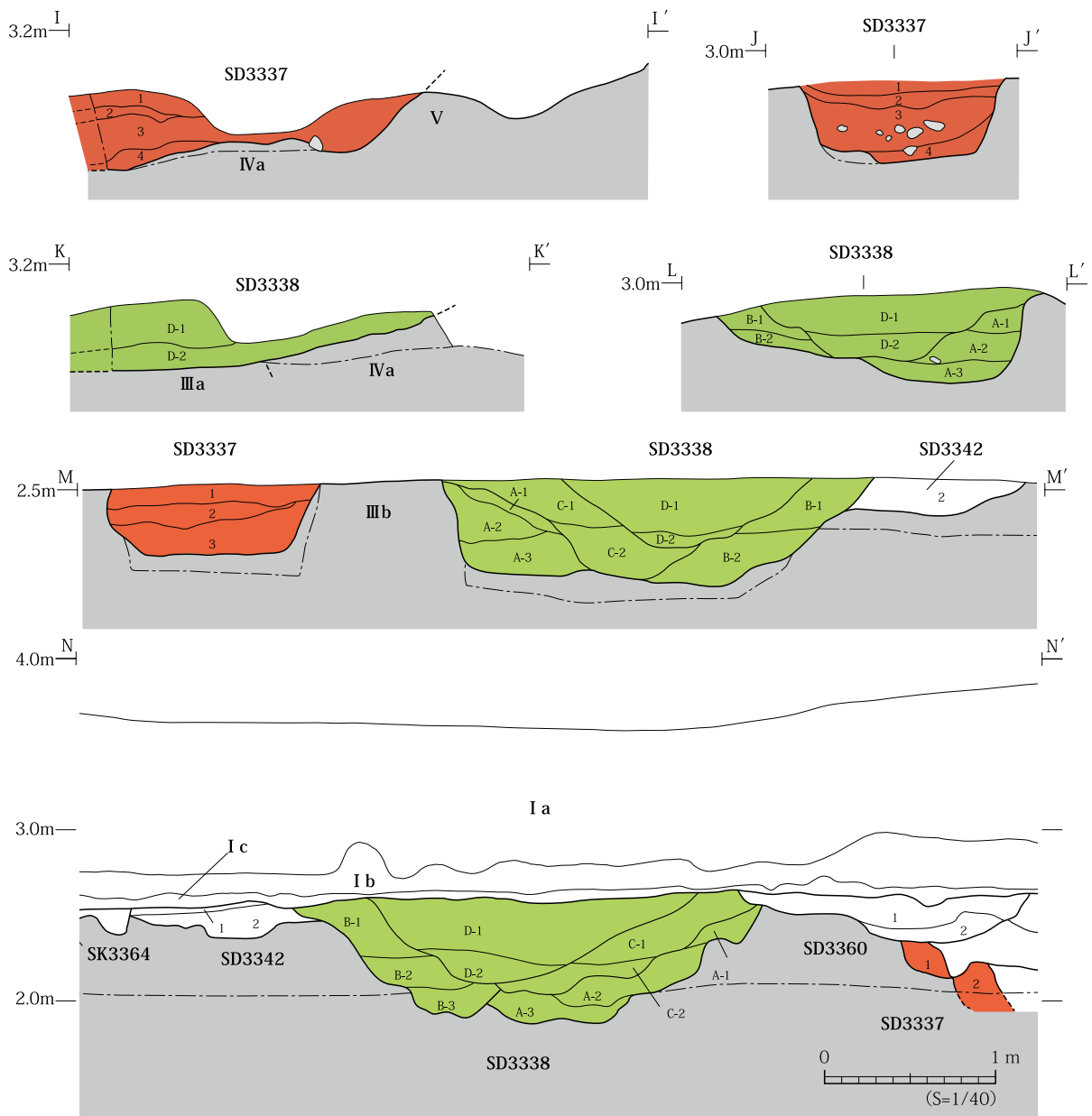
Aの規模は上幅が1.6m以上、下幅が0.5m、深さが0.5～0.7mで、断面形は逆台形状を呈すとみられる。底面の傾斜は南の低地から北の丘陵裾に向かって緩やかに上がる。堆積土は3層に細分できる。1層はにぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質粘土、2層は灰黄褐色(10YR7/3)シルト、3層は黒褐色粘土ブロックを少し含むにぶい黄橙色(10YR7/3)シルトで、自然堆積土である。遺物は出土していない。

Bの規模は上幅が1.3m以上、下幅が0.4m、深さが0.3～0.7mで、断面形は下端から上端へと緩やかに開くU字状を呈するとみられる。底面の傾斜は南の低地から北の丘陵裾に向かって緩やかに上がる。堆積土は3層に細分できる。1層は褐灰色(10YR4/1)粘土、2層は黒褐色粘土ブロックをやや多く含むにぶい黄橙色(10YR7/3)シルト、3層は黒色土・灰褐色土ブロックを多く含むオリーブ黒色(7.5Y3/1)シルトで、自然堆積土である。遺物は1・2層から須恵器甕と丸瓦が出土している。

Cの規模は上幅が1.5m以上、下幅が0.3m、深さが0.6mで、断面形は下端から上端へと緩やかに

開くU字状を呈するとみられる。底面の傾斜は近接した場所で確認したため詳細は不明である。堆積土は2層に細分できる。1層は灰黄褐色（10YR5/2）シルト質粘土、2層は地山ブロックを少し含む褐色（10YR4/1）粘土で、自然堆積土である。遺物は平瓦 I B・II B類が出土している。

Dの規模は上幅が1.5~2.0m、下幅が0.4~0.5m、深さが0.4~0.5mで、断面形は下端から上端へと緩やかに開く逆U字状を呈する。底面の傾斜は南の低地から北の丘陵裾に向かって緩やかに上がる。堆積土は2層に細分できる。ともに酸化鉄が沈着する。1層はにぶい黄橙色（10YR6/4）粘土、2層は灰黄褐色（10YR4/4）シルト質粘土で、自然堆積土である。遺物は平瓦 I C・II B類と丸瓦が出土している。



図版 13 SX3000 南北大路跡東側溝 SD3337・3338 断面図



1 SD3337・3338 東側溝全景 (南から)



2 SD3337 東側溝縦断面 I-I (南東から)



3 SD3337 東側溝横断面 J-J' (北から)



4 SD3338 東側溝縦断面 K-K' (東から)



5 SD3338 東側溝横断面 L-L' (東から)



6 SD3337 東側溝横断面 M-M' (南から)



7 SD3338 東側溝横断面 M-M' (南から)



8 SD3338 東側溝横断面 N-N' (北から)

図版 14 SX3000 南北大路跡 SD3337・3338 東側溝平面・断面

【SX3341 整地層】 (図版 8・15～18)

SX3341 整地層は、T 3 中央の第Ⅲb 層上に堆積する。範囲は南北が 1.2m 以上、東西が 5.8m で、厚さは 0.5m である。SX3339 路面堆積層に覆われる。a～d の 4 層がみられるが、北側の SX3339 路面堆積層を掘り下げなかったため、各層の範囲は不明である。

a は SX3341c・d 整地層より古い。残存する範囲は東西 1.8m、南北 0.9m 以上、厚さ 0.3m で、断面形は皿状を呈す。地山ブロックをやや多く含むややしまりが強い黒褐色 (10YR5/1) シルト質粘土で、整地されている。遺物は土師器高坏・甕が出土している。

b は SX3341c 整地層より古い。残存する範囲は東西 0.5m、南北 0.5m 以上、厚さ 0.3m で、断面形は底面に凹凸がある逆台形状を呈すとみられる。黒褐色粘土ブロックと灰褐色砂を少し含むややしまりが強い灰色 (5Y4/1) 粘土で、整地されている。遺物は土師器高坏・甕が出土している。

c は SX3341a・b 整地層より新しい。残存する範囲は東西 2.9m、南北 0.2m 以上、厚さ 0.2m である。堆積土は灰褐色土粘土ブロックを含む暗灰黄色 (5Y3/2) 細砂で、整地されている。遺物は土師器甕と須恵器甕が出土している。

d は SX3354・3356 自然流路跡より古く、SX3341a 整地層より新しい。残存する範囲は南北 1.1m 以上、東西 0.4m 以上、厚さ 0.1m である。堆積土は灰褐色土ブロックを含む灰色 (N4/0) 砂質シルトで、整地されている。遺物は出土していない。

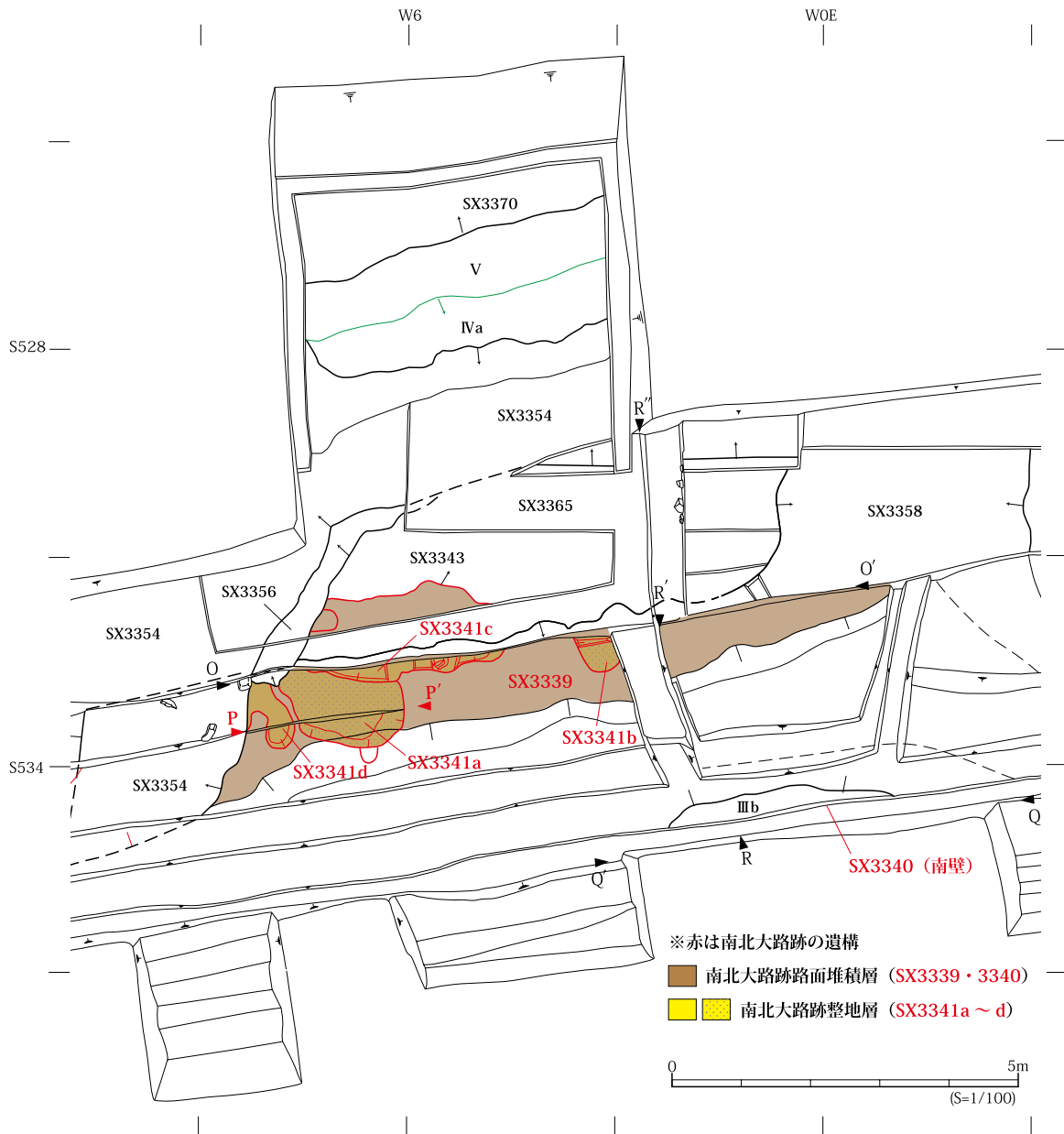
【SX3339 路面堆積層】 (図版 8・15～19)

SX3339 路面堆積層は、T 3 中央の SX3341 整地層上と第Ⅲb 層上に堆積する。SX3343・3354・3356・3358 自然流路跡より古く、SX3341 整地層より新しい。確認した範囲は南北 2.0m、東西 9.5m で、厚さは最大 0.2m である。堆積層は 6 層あるが 3 層に大別できる。全て自然堆積土で遺物は出土していない。各層とも硬化面は認められなかったが、SX3341 整地層上と第Ⅲb 層上に堆積すること、SX3341 整地層と範囲がおおよそ重なること、各大別層の上面がほぼ平坦となることから、路面堆積層と推定した。

大別 1 層 (1～3 層) は深さが 0.1m で、堆積土は 3 層に細分できる。1 層は黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質土、2 層はオリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粗砂、3 層は褐色 (10YR4/4) 粗砂である。大別 2 層 (4 層) は深さが 0.1m で、にぶい黄褐色 (2.5Y5/1) 砂質シルトである。大別 3 層 (5・6 層) は深さ 0.1m で、堆積土は 2 層に細分できる。1 層はにぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂、2 層は褐色 (10YR4/4) 粗砂である。

【SX3340 路面堆積層】 (図版 8・15・17・18)

SX3340 路面堆積層は、T 3 中央南端の第Ⅲ b 層上に堆積する。SX3358 自然流路跡より古い。南壁のみで確認したため、範囲は南北が不明、東西が 3.2m で、厚さが 0.2m である。第Ⅲb 層上に堆積すること、上面及び下面が平坦に近いことから、路面堆積層と推定した。堆積層は 3 層に細分できる。1 層は暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質シルト、2 層は黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土、3 層はにぶい黄色 (2.5Y6/4) シルトで、自然堆積土である。遺物は出土していない。



図版 15 SX3000 南北大路跡 SX3339 路面堆積層、SX3341 整地層平面図

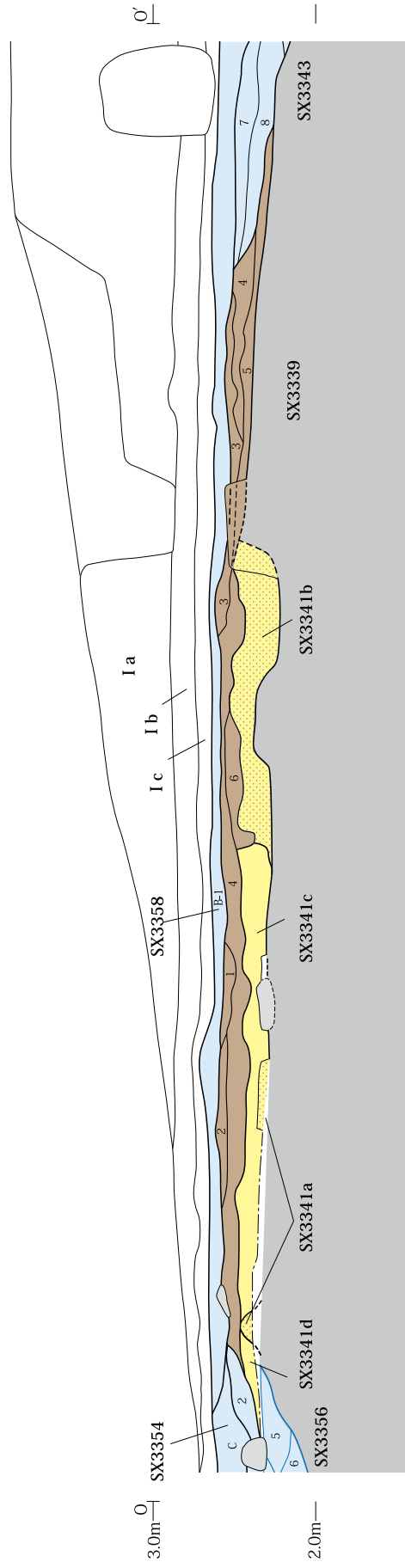


近景1 (南から)

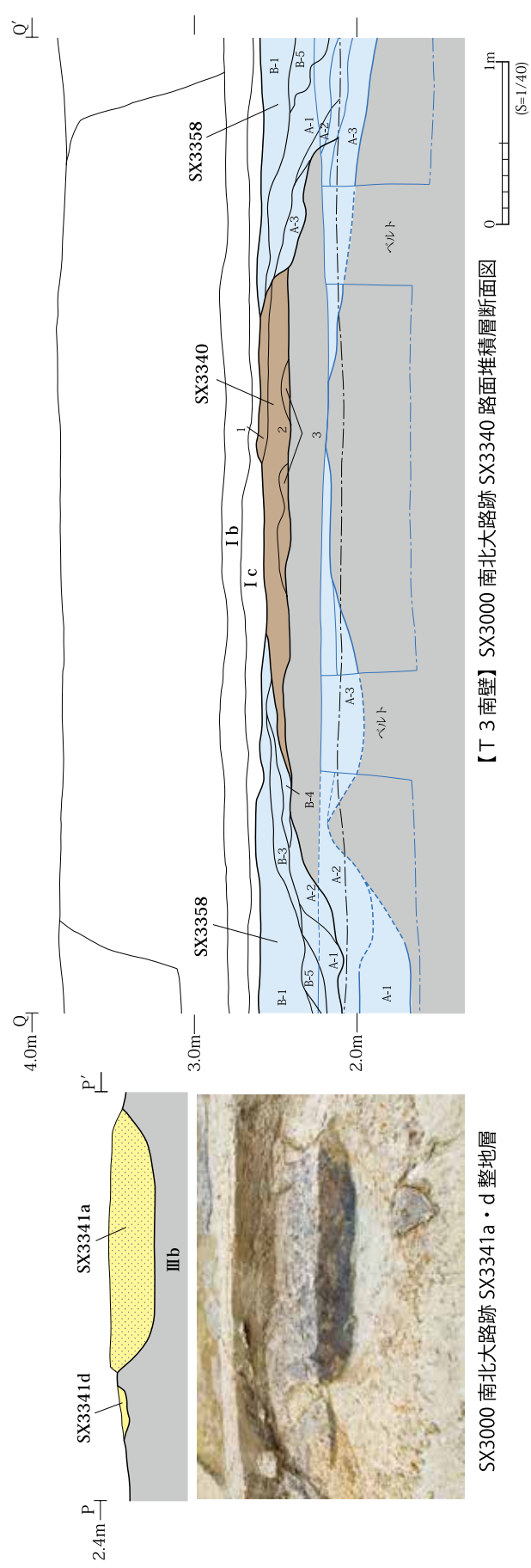


近景2 (南西から)

図版 16 SX3000 南北大路跡 SX3339 路面堆積層、SX3341 整地層近景



【T-3北壁】SX3000 南北大路跡 SX3339 路面堆積層・SX3341a～d 整地層断面図



【T-3南壁】SX3000 南北大路跡 SX3340 路面堆積層断面図

図版 17 SX3000 南北大路跡 SX3339・3340 路面堆積層、SX3341 整地断面図

SX3000 南北大路跡 SX3341a・d 整地層



1 SX3339 路面堆積層、SX3341 整地層（南から）



2 SX3341b 整地層（南から）



3 SX3341c 整地層（南から）



3 SX3340 路面堆積層（南東から）

図版 18 SX3000 南北大路跡 SX3339・3340 路面堆積層、SX3341 整地層断面

【SD3342 溝】（図版 3・8・12・21）

T 3 東端の第Ⅲb 層上面で検出した南北方向の溝である。SK3364 土壙、南北大路跡の SD3338 東側溝より古い。検出した長さは 2.8m で、方向は南北の発掘基準線とほぼ同じである。規模は幅が 1.1 m、深さが 0.2m で、断面形は皿状を呈す。堆積土は、2層に細分できる。1層は灰黄褐色（10YR4/2）シルト、2層は暗灰黄色（2.5UY4/2）粘土質シルトで、自然堆積土である。

遺物は須恵器甕（図版 22-1）が出土している。

B 南北大路より新しい遺構

整地層1、溝1、土壌3、自然流路跡12がある。なお、自然流路は第1表にまとめ、年代が推定できる2箇所について詳述する。

【SX3365 整地層】(図版3・8・10・11・19・20-4)

T3中央北部のSX3343・3354BC自然流路跡、南北大路跡のSX3339路面堆積土、第IVa・V層上に盛土された整地層で、調査区北西側へさらに広がる。SX3358Bより古い。確認した範囲は南北2.3m、東西12.0mで、厚さは最大0.3mである。地山ブロックを主体とした灰黄褐色(10YR5/2)粘土で整地されている。

遺物は土師器甕、須恵器長頸瓶、須恵系土器の坏または皿が出土している。

【SD3347 溝】(図版3・5)

T1中央部の第V層上面で検出した南北方向の溝である。検出した長さは2.6mで、方向は南北の発掘基準線とほぼ同じである。規模は幅が2.5m、深さが0.3mで、断面形は皿状を呈す。堆積土は2層に細分できる。1層が地山ブロックを含む暗褐色(2.5Y4/2)砂質シルト、2層が暗緑灰(10GY4/1)粘土で、自然堆積土である。

遺物は出土していない。

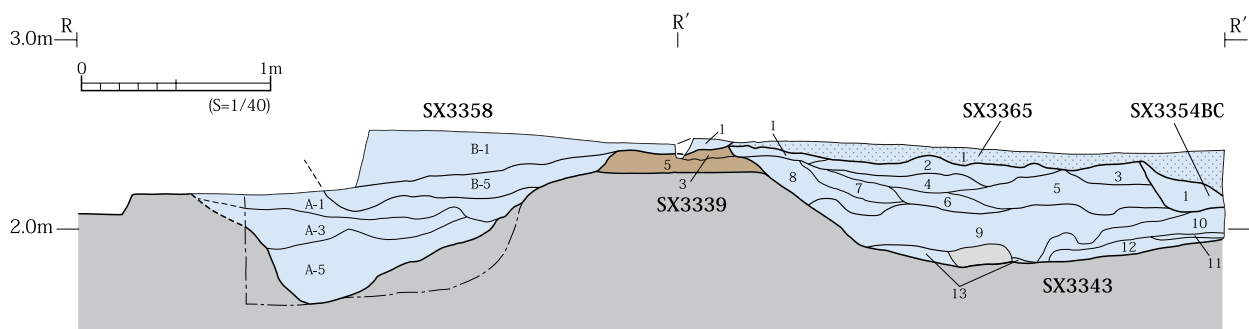
【SD3360 溝】(図版3・8)

T3東部の第IIIb層上面で検出した北西から南東方向の溝である。SX3359自然流路跡、SK3368土壌、南北大路跡のSD3337・3338東側溝より新しい。検出した長さは4.4mで、方向は、南北の発掘基準線に対し、北で西に24°振れる。規模は上幅が1.7m、下幅が0.5m、深さが0.3mで、断面形は皿状を呈す。堆積土は2層に細分できる。1層は黄褐色土ブロックを含む黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト、2層は黄褐色土ブロックと酸化鉄を含む灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、自然堆積土である。

遺物は出土していない。

【SK3349 土壌】(図版3・8)

T1南部の第IIIb層上面で検出した土壌である。SX3352自然流路跡より古く、南北大路跡のSD3338東側溝より新しい。SX3352自然流路跡に切られているため平面形は不明である。規模は長軸が3.1m、短軸が2.6m以上である。堆積土は旧表土由来の黒色土ブロックと灰白色火山灰粒を少し含むにぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルトで、自然堆積土である。



図版 19 SX3358・3365・3354・3343・3339 断面図



1 T3西部自然流路跡近景（南東から）



2 T3西部自然流路跡断面（北東から）



3 T3北部自然流路跡近景（北東から）



4 SX3365 整地層、SX3343・3354・3365 自然流路跡（南東から）



5 SX3358 自然流路跡断面（南東から）



6 SX3343・3358・3359 自然流路跡（南東から）



7 SX3349 土壙、SX3351・3352 自然流路跡（南西から）

図版 20 SX3000 南北大路跡廃絶以降の土壙・自然流路跡

遺物は出土していない。

【SK3366 土壌】 (図版 8)

T 3 西端で南壁断面のみで確認した土壌である。SX3353・3354B 自然流路跡より新しい。南側の調査区外に広がるため平面形は不明である。規模は上幅が 1.1m、下幅が 0.6m、深さが 0.15mで、断面形は皿状である。堆積土は黄褐色ブロックを含む灰オリーブ色 (2.5Y3/3) 砂質シルトで、自然堆積土である。

遺物は出土していない。

【SK3368 土壌】 (図版 3・8)

T 3 東部の第Ⅲb 層上面で検出した土壌である。SD3360 溝より古く、SD3338 溝より新しい。SD3360 溝跡に切られていること、北側の調査区外に広がるため平面形は不明である。

規模は長軸が 0.6m、短軸が 0.2m以上、深さが 0.1mである。堆積土はオリーブ褐色(2.5Y4/3) 砂質シルトで、自然堆積土である。

遺物は出土していない。

【SX3343 自然流路跡】 (図版 3・8・10・19、20-4・6、21)

T 3 中央部で検出した東西方向の自然流路跡である。SX3354BC・3358B 自然流路跡、SX3365 整地層より古く、南北大路跡の SX3339 路面堆積層より新しい。検出した長さは 6.4mで、方向は東西の発掘基準線とはほぼ同じである。規模は上幅が 2.5m以上、下幅が 2.6m以上、深さが 0.6mで、断面形は皿状を呈す。堆積土は 13 層あるが、4 層に大別できる。大別 1 層 (1～3 層) は灰黄褐色 (10YR5/1) 砂質シルト、大別 2 層 (4～8 層) はにぶい黄褐色 (5YR4/3) 砂を少し含む褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト、大別 3 層 (9～12 層) は黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土や粘土、大別 4 層 (13 層) は両拳大の礫を少し含む青灰色 (10BG5/1) 粗砂で、自然堆積土である。

遺物は 大別 2 層から土師器坏・甕、須恵系土器坏、大別 3 層から土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土器坏または皿が出土している。大別 4 層から須恵器甕、須恵系土器坏 (図版 22-2)、坏または皿、平瓦 II C 類、石鏃が出土している。

【SX3356 自然流路跡】 (図版 3・8、20-1・2・21)

T 3 西部で検出した北東から南西方向の自然流路跡である。SX3354A・BC・3355・3357・3358AB 自然流路跡、SX3365 整地層より古く、南北大路跡の SX3339 路面堆積層・SX3341d 整地層より新しい。検出した長さは 9.0mで、方向は、南北の発掘基準線に対し北で東に 32° 振れる。規模は上幅が 5.4m以上、下幅が 4.3m、深さが 1mで、断面形は皿状を呈す。堆積土は 5 層あるが、2 層に大別できる。大別 1 層 (1～3 層) は黒色 (2.5Y2/1) 粘土、大別 2 層 (4・5 層) は黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂・粗砂で、自然堆積土である。

遺物は 大別 2 層から土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土器小皿 (図版 22-5)・坏または皿、瓦が出土している。瓦には平瓦 I A・II B・II C 類がある。

遺構	位置	検出面	形状	重複関係	検出長 (m)	方向 (発掘基準線)	幅 (m)	深さ (m)	断面形	主な堆積土 (全て自然堆積)	主な出土遺物	遺物図版
SX3343	T3中央部	SX3000 (SX3339)・ SX3354BC	直線状	SX3354BC・3358B・ SX3365より古く、 SX3000(SX3339)より 新しい	6.4	東西と ほぼ同じ	2.5以上	0.6	皿状	灰黄褐色・黒褐色 砂質シルト・粘土	【大別2層】土師器環・甕、須恵系土器環 【大別3層】 土師器環・甕、須恵器甕、須恵系土器環または皿 【大別4層】 須恵器甕、須恵系土器環または皿、平瓦II C類、石織	【大別4層】 須恵系土器環 (図版22-2)
SX3351	T1南東	第III a・b層	直線状	SX3000(SD3337・3338) より新しい	9.5	N-16°-E	1.3~3.8	0.2以上	不明	オリーブ褐色 粘土質シルト	なし	
SX3352	T1南東	第III b層	直線状	SX3000(SD3337・3338)・ SX3349より新しい	7.5	N-39°-E	1.1~3.2	0.3以上	不明	黒褐色・黒色 砂質シルト・粘土	なし	
SX3353	T3西部	第III b層	直線状	SK3366、SX3354Aより古く、 SD3361、SK3362・3363、 SX3355・3357より新しい	4.5	N-33°-E	5.9以上	0.4~0.5	皿状・ 逆台形状	黄褐色砂質シルト・ 灰オリーブ色粘土 (灰白色火山灰ブロック混)	【大別1層】 土師器甕、須恵器甕、瓦(丸瓦、平瓦IA・IIC類) 【大別2層】 土師器甕、須恵器環、須恵系土器環または皿、 平瓦IA類	
SX3354A	T3西部			SX3353・3357・3356より 新しい	11.6		4.6以上	0.4以上	不明	灰オリーブ色・ オリーブ黒褐色砂質・ 粘土質シルト	なし	
SX3354B	T3西部	第III b・ IV a層、 SX3353	弧状	SX3358Bより古く、 SX3356・3357・3358A より新しい	11.6	東西 E-29°-N 南北 N-35°-E	2.8以上	0.8以上	逆台形状	オリーブ黒色 砂質シルト・粘土質シルト	【1・2層】 土師器環・甕、須恵器長頸瓶、大戸窯産の長頸瓶、 須恵系土器環・坏または皿・高台鉢	【1・2層】 双耳瓶の把手 (図版22-3) 白磁碗 (図版22-4)
SX3354C	T3西部			SX3365、SX3358Bより古く、 SX3353・3356より新しい	11.6		2.4~5	0.3~0.5	皿状・ 逆台形状	暗オリーブ砂質シルト	なし	
SX3355	T3西部	第III b層、 SX3356	ゆるやかな 弧状	SX3353・3357より古く、 SX3356より新しい	3.7	N-33°-E	3.3以上	0.6以上	逆台形状	黒色砂質土・粘土質シルト (灰白色火山灰ブロック混)	【大別2層】 土師器環・甕、須恵器甕・長頸瓶、須恵系土器小皿・ 坏・坏または皿、瓦(平瓦II B・IIC類)	
SX3356	T3西部	SX3355 SX3000 (SX3339)	ゆるやかな 弧状	SX3354A~C・3355・3357・ 3358AB、SX3365より古く、 SX3000(SX3339・SX3341d) より新しい	9	N-32°-E	5.4以上	1.0	皿状	黒色粘土・黒褐色砂	【大別2層】 土師器環・甕、須恵器甕、須恵系土器環または皿、 瓦(平瓦IA・II B・IIC類)	【大別2層】 須恵系土器小皿 (図版22-5)
SX3357	T3西部	SX3355・ 3356	ゆるやかな 弧状か	SX3353・3354AB、 SK3366より古く、 SX3355・3356より 新しい	4.1	N-30°-E	1.6	0.5	U字状か	オリーブ黒色砂質シルト	【1・2層】 土師器環・甕、須恵器甕、須恵系土器環・小皿、 坏か小皿 【2層】 土師器甕、須恵器長頸瓶・甕、須恵系土器環・ 坏または皿、瓦(平瓦II B・IIC類)	
SX3358A	T3中央部			SX3354BCより古く、 SX3343・3356・3359、 SX3000(SX3339・3340)より 新しい	延べ 約17	南側 N-15°-W 南西側 E-20°-N	1.8~2.0	0.2~0.6	U字状	オリーブ黒色 シルト質粘土・ 粘土質シルト	【大別1層】 土師器甕、須恵器甕、瓦(平瓦II Ba類・丸瓦II類) 【大別2層】東濃産の灰釉陶器瓶 【大別1・3層】 土師器環・甕、須恵器甕・長頸瓶、須恵系土器環、 瓦(型番不明の軒丸瓦、丸瓦II・II B類、平瓦II B・ IIC類)	
SX3358B	T3中央部	SX3359・ 3365	中央付近で 南と南西に分岐、 南側が直線状 南西側が ゆるやかな弧状	SX3343・3356・3359・ 3354C、SX3365、 SX3000(SX3339・3340) より新しい			2.5~3.6	0.3~0.5	上端が開く U字状	灰黄褐色砂質シルト にぶい黄褐色砂質土 (酸化鉄の沈着部分あり)	【大別1層】土師器甕、須恵器・長頸瓶、 【大別2層】東濃産の灰釉陶器瓶 【大別3層】須恵器長頸瓶、丸瓦II B類 【大別1・2層】 土師器環・甕、須恵器環・長頸瓶・甕、 須恵系土器環・高台環または皿、 瓦(丸瓦、平瓦I Ca・II Ba・IIC類)	【大別1層】 土師器高台碗 (図版22-6) 【A・B所属不明】 須恵系土器 高台環または高台皿 (図版22-7) 二重弧文軒平瓦512a (図版22-12) 磁石 (図版22-14)
SX3359	T3東部	第III b層	弧状か	SX3358・3360より古く、 SX3000(SD3337)より 新しい	8.6	N-7°-W	3.5以上	0.5~1.0	逆台形状	にぶい黄褐色・暗灰黄色 砂質シルト	【大別1層】土師器環 【大別2層】土師器環・甕・坏または皿、 須恵器長頸瓶、丸瓦 【大別3層】土師器高台碗・甕、 大戸窯産の須恵器長頸瓶、須恵系土器環	【大別1層】 土師器環 (図版22-8)
SX3360	T3東部	第III b層	直線状	SX3359、SK3368、 SX3000(SD3337・3338) より新しい	4.4	N-24°-W	1.7	0.3	皿状	黒褐色砂質シルト 黄褐色粘土質シルト	なし	

第1表 南北大路以後の自然流路一覧

C 南北大路との関係が不明な遺構

溝3、土壇5がある。堆積土は全て自然堆積土で、遺物は出土していない。

【SD3344 溝】 (図版3・6)

T2西部の第V層上面で検出した南北方向の溝である。南でやや西に広がる。検出した長さは3.9mで、方向は南北の発掘基準線に対し北で東に2°振れる。規模は幅が0.4~3.6m、深さが0.4mで、断面形は皿状を呈す。堆積土は5層に細分できる。褐灰色(10YR5/1)砂質シルトと小礫をやや多く含むにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質砂の互層である。

【SD3345 溝】 (図版3・6)

T2西部の第II・V層上面で検出した南北方向の溝である。検出した長さは4.0mで、方向は南北の発掘基準線とほぼ同じである。規模は幅が0.7m以上、深さが0.4mで、断面形は東の調査区外へと広がるため不明である。堆積土は5層に細分できる。1層が褐灰色(10YR5/1)砂質シルト、2層がにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土、3層が灰黄褐色(10YR5/2)粘土、4層が褐灰色(10YR4/1)シルト質粘土、5層が地山礫をやや多く含む灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルトである。

【SD3361 溝】 (図版 3・8)

T 3 西端の第Ⅲb 層上面で検出した北西から南東方向の溝である。南東端で 2 つに分かれる。SX3353 自然流路跡より古く、SK3362・3363 土壌より新しい。検出した長さは 1.7m で、方向は南北の発掘基準線に対し北で西に 41° 振れる。規模は幅が 0.6m、深さが 0.3m で、断面形は箱状を呈す。堆積土は、2 層に細分できる。1 層はオリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂、2 層は黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルトである。

【SK3346 土壌】 (図版 3・6・7-4)

T 2 北東端の第 V 層上面で検出した土壌である。平面形は北・東の調査区外に広がるため不明である。規模は長軸が 2.0m 以上、短軸が 1.0m 以上である。堆積土は 2 層に細分できる。1 層が地山礫をやや多く含むにぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト、2 層が地山ブロックをやや多く含む褐灰色シルトである。

【SK3350 土壌】 (図版 3)

T 1 南東部の第Ⅲb 層上面で検出した土壌である。平面形は東の調査区外に広がるため不明である。規模は長軸が 0.7m、短軸が 0.3m 以上である。堆積土は黄色 (2.5Y6/4) 粘土質シルトである。

【SK3362 土壌】 (図版 8)

T 3 西端の第Ⅲb 層上面の北壁断面で確認した土壌である。SD3361 溝より古い。平面形は北の調査区外へ広がるため不明である。規模は上幅が 1.7m 以上、下幅が 1.1m、深さが 0.3m で、断面形は皿状である。堆積土は 2 層に細分できる。1 層が灰白色火山灰ブロックを含むにぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト、2 層が褐色 (10YR4/4) 粗砂である。

【SK3363 土壌】 (図版 3・10・11-2)

T 3 西部の第Ⅲb 層上面で検出した土壌である。SD3361 溝より古い。平面形は北・西の調査区外に広がるため不明である。規模は長軸が 2.0m 以上、短軸が 1.3m 以上である。堆積土は 3 層に細分できる。1 層は黒褐色 (10YR2/2) シルト、2 層は灰白色火山灰 (To-a)、3 層は褐灰色粘土である。

【SK3364 土壌】 (図版 8)

T 3 東端の第Ⅲb 層の南壁断面で確認した土壌である。SD3342 溝より新しい。平面形は南・東の調査区外へと広がるため不明である。規模は幅が 0.8m 以上、深さが 0.1m で、断面形は不明である。堆積土は黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土である。

D 基本層序等の出土遺物(図版 21)

【第 I・Ⅲ・Ⅳ層、排水溝出土遺物】

土器、陶磁器、瓦、石製品、動物遺存体が出土しており、特徴的な遺物のみ図示した。土器には弥生土器、土師器、須恵器、須恵系土器がある。土師器には坏・高台坏・高台埴・鉢 (図版 22-11)・壺・甕・甗? がある。第Ⅳb 層出土の鉢は頸部で塩釜式とみられる。須恵器には坏・蓋・高台坏・長頸瓶・甕があり、T 3 南排水溝出土の高台坏 (図版 22-9) は底部に爪形痕を残す。須恵系土器は坏・小皿・鉢がある。

陶磁器には白磁、中世陶器、近世陶器・磁器がある。白磁には削り出し高台の皿（図版 22-10）がある。底部内面の釉をかき取っている。

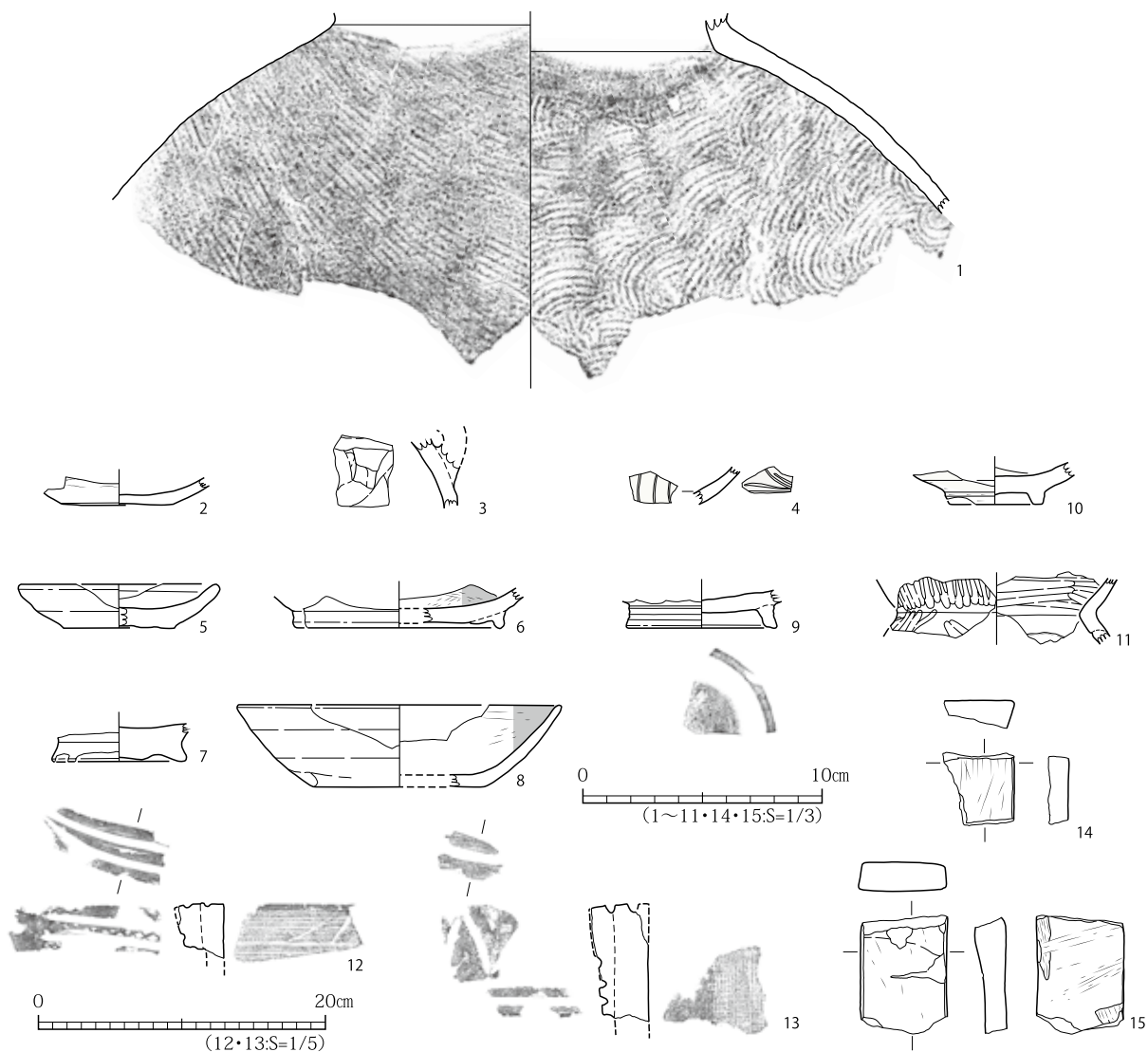
瓦には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、軒丸瓦には第Ⅱ期の重弁蓮華文、軒平瓦には二重弧文 511（図版 22-13）がある。丸瓦にはⅡB類、平瓦にはⅠA・ⅠBa・ⅡB・ⅡBa・ⅡBb・ⅡC類がある。

石製品には砥石（図版 22-15）、動物遺存体にはウマの部位不明の骨がある。



図版 21 第 91 次調査出土遺物写真

(7・9は縮尺 1/2、それ以外は 1/3)



No.	出土遺構・層位	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	登録	写真図版	箱番号
1	SD3342 1層	須恵器 甕	肩部のみ	—	—	—	外面:平行タタキ 内面:青海波	R1	図版22-11	B15952
2	SX3343 13層	須恵系土器 杯	底部4/5	—	4.7	(1.2)	底部:回転糸切り無調整	R2	図版22-5	B15952
3	SX3354B 1・2層	須恵器 双耳瓶か	肩部のみ	—	—	—	大戸窯産	R15	図版22-3	B15952
4	SX3354B 1・2層	白磁 碗	体部のみ	—	—	—	外面:縦ヘラ花卉 内面:草花文?	R11	図版22-7	B15952
5	SX3356 5層	須恵系土器 小皿	1/5	(8.0)	4.6	1.8	底部:回転糸切り無調整 内面:ハケ目?→ロクロナデ	R5	図版22-6	B15952
6	SX3358B 1層	土師器 高台埴	底部1/5	—	(8.4)	—	底部:ナデ 内面:放射状ヘラミガキ、黒色処理	R3		B15952
7	SX3358A-3~B-5層	須恵系土器 高台坏か高台皿	底部1/1	—	5.6	(1.6)	底部:ナデ	R6	図版22-8	B15952
8	SX3359 1~3層	土師器 杯	1/3	(13.4)	(7.2)	3.4	底部~体部下端:手持ちヘラケズリ? 内面:ヘラミミガキ、黒色処理	R7	図版22-1	B15952
9	T3 南排水溝	須恵器 高台坏	底部1/5	—	(6.0)	(1.6)	底部:ナデ→爪形痕	R8	図版22-2	B15952
10	T3 Ic層	白磁 皿	底部1/1	—	3.9	(1.7)	底部:削出高台 内面:底部軸かぎ取り 皿III-1類(12世紀中葉)	R13	図版22-4	B15952
11	T3 IVb層	土師器 鉢	頸部のみ	—	—	—	外面:ミガキ 内面:頸部ヨコミガキ 塩釜式?	R26		B15952

No.	出土層位	種類	残存	長さ	幅	厚さ	特徴	登録	写真図版	箱番号
12	SX3358A-3~B-5層	軒平瓦	瓦当のみ	—	—	(3.2)	二重弧文512a 頸部外面:格子タタキ→ナデ 凹面:横方向に糸切り→布目→端部ヘラケズリ	R28		B15952
13	T2 南排水溝	軒平瓦	瓦当のみ	—	—	(3.0)	二重弧文511 頸部外面:鋸歯文、2条沈線、凹面:布目→ナデ	R29		B15952
14	SX3358A-3~B-5層	砥石	一部	(3.0)	(2.0)	(0.9)	重量:(11.4g) 石材:凝灰岩	R32		B15952
15	T3 III層	砥石	一部	(4.9)	3.7	(1.5)	重量:(36.7g) 石材:凝灰岩	R33	図版22-10	B15952

図版 22 第 91 次調査出土遺物

3. 総括

(1) 遺物について

今次調査の出土遺物には、土器、陶磁器、瓦、石製品、動・植物遺存体がある。ここではわずかな量であるが南北大路よりも新しい遺構から出土した遺物の年代について検討する。

SX3343 自然流路跡 13 層出土の須恵系土器坏 (図版 22-2) は、全体に器壁が薄く体部が斜め上方へ立ち上がる。須恵系土器坏は多賀城出土土器編年 (『本文編』、白鳥 1980) の E 群に出現して以降も続くが、F 群の第 5 次政庁地区 SK058 (『本文編』) や第 68 次大畑地区 SK2449 出土土器 (『年報 1997』) では薄手のものが確認できるものの、それよりも型式学的に新しい第 5 次政庁地区 SK078 (『政庁跡本文編』) や第 66 次大畑地区 SX2319 出土土器 (『年報 1995』) は、器壁が厚く全体に偏平化しており、SX3343 自然流路跡 13 層出土須恵系土器坏は前者に近い特徴をもつ。年代について、E 群は 10 世紀前半頃、F 群の SK058 は 10 世紀後半頃、SK078 は 11 世紀前半頃と想定していることから (『補遺編』)、10 世紀前半から後半頃と考えられる。

SX3356 自然流路跡 5 層から出土した須恵系土器小皿 (図版 22-5) は、口径 8.0cm と小さく、偏平で口縁部がわずかに内湾し、全体に器壁の厚いつくりである。こうした特徴は F 群よりも後出するもので、古川一明 (2007) の G 群に類似する。G 群は共伴する太宰府市分類 (太宰府市教育委員会 2000) の白磁碗Ⅱ類やⅣ類の年代から、11 世紀後半から 12 世紀前半頃とみており (『補遺編』)、SX3356 自然流路跡 5 層出土小皿もその頃である可能性が高い。

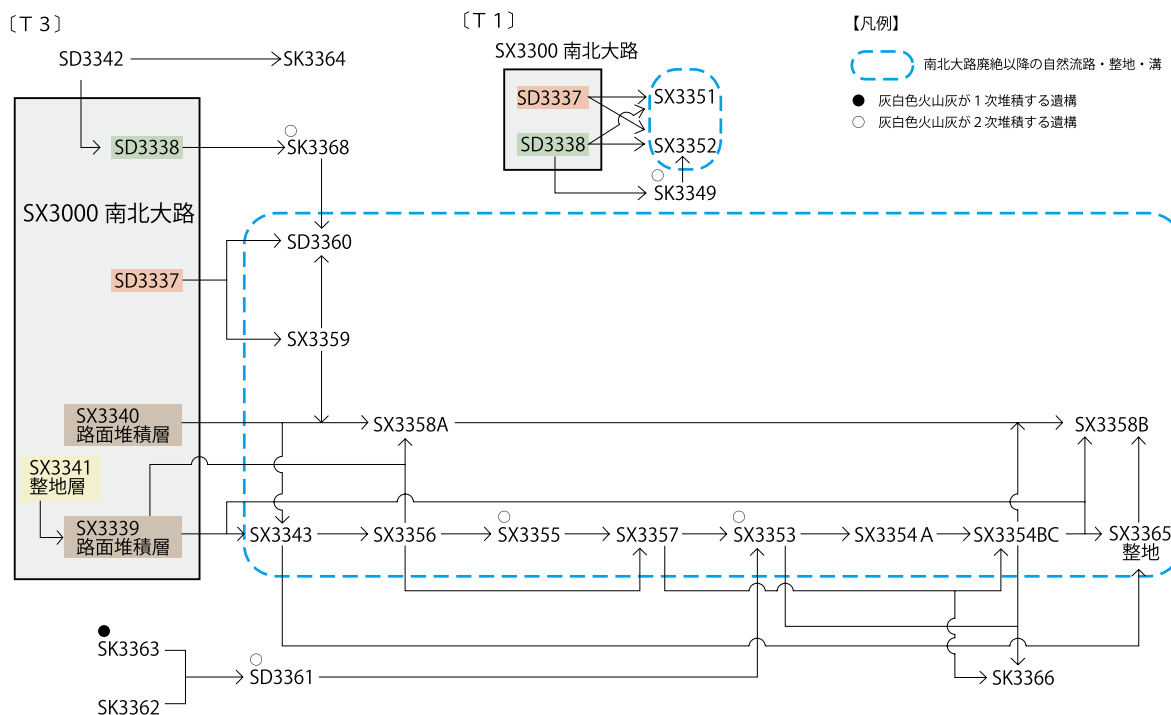
(2) 遺構について

「A 南北大路とそれ以前の遺構」には東側溝、整地層、堆積層、溝、「B 南北大路より新しい遺構」には溝、土壌、整地、自然流路跡、「C 南北大路との関係が不明な遺構」には溝、土壌がある。これらの遺構の重複関係を図版 23 に示した。以下、主要な遺構として、南北大路と南北大路廃絶後の自然流路跡について述べる。

①年代

SX3000 南北大路には、大路 A (SD3337 東側溝)、大路 B (SD3338 東側溝)、SX3341 整地層、SX3339・3340 路面堆積層がある。これらの遺構からその構築年代や存続年代を限定できる遺物はほとんど出土していないため、その年代を特定することは難しいが、路面や東側溝の位置、方向、規模等は、隣接する県道泉一塩釜線による SX5230 と一連と考えられ、年代も同様と推測できる。今回の調査で検出した南北大路廃絶後の自然流路跡の出土遺物をみると、最古の SX3343 自然流路跡 13 層 (底面) から 10 世紀前半から後半頃の須恵系土器坏 (図版 22-2) が出土していることから、南北大路の廃絶年代は 10 世紀前半から後半以降で、10 世紀後葉に廃絶していたとする県道泉一塩釜線の調査と矛盾しない (宮城県教育委員会 2001)。

一方、SX3343 以外の自然流路跡の年代は、SX3356 自然流路跡 5 層 (最下層) から出土した須恵系土器小皿 (図版 22-5) の年代から、11 世紀後半から 12 世紀前半以降とみられる。さらに、



図版 23 遺構変遷図

SX3356 の堆積土に注目すると、大別 1 層（1～3 層）は粘性が強い特徴的な黒褐色粘土で、SX5222 河岸跡の埋没土（1 層）である黒褐色粘土と非常に類似する（宮城県教育委員会 2001）（図版 24）。この年代は中世とされていることから、SX3356 の大別 1 層（1～3 層）とそれより新しい自然流路跡は中世以降に形成された可能性が高い。

②特徴

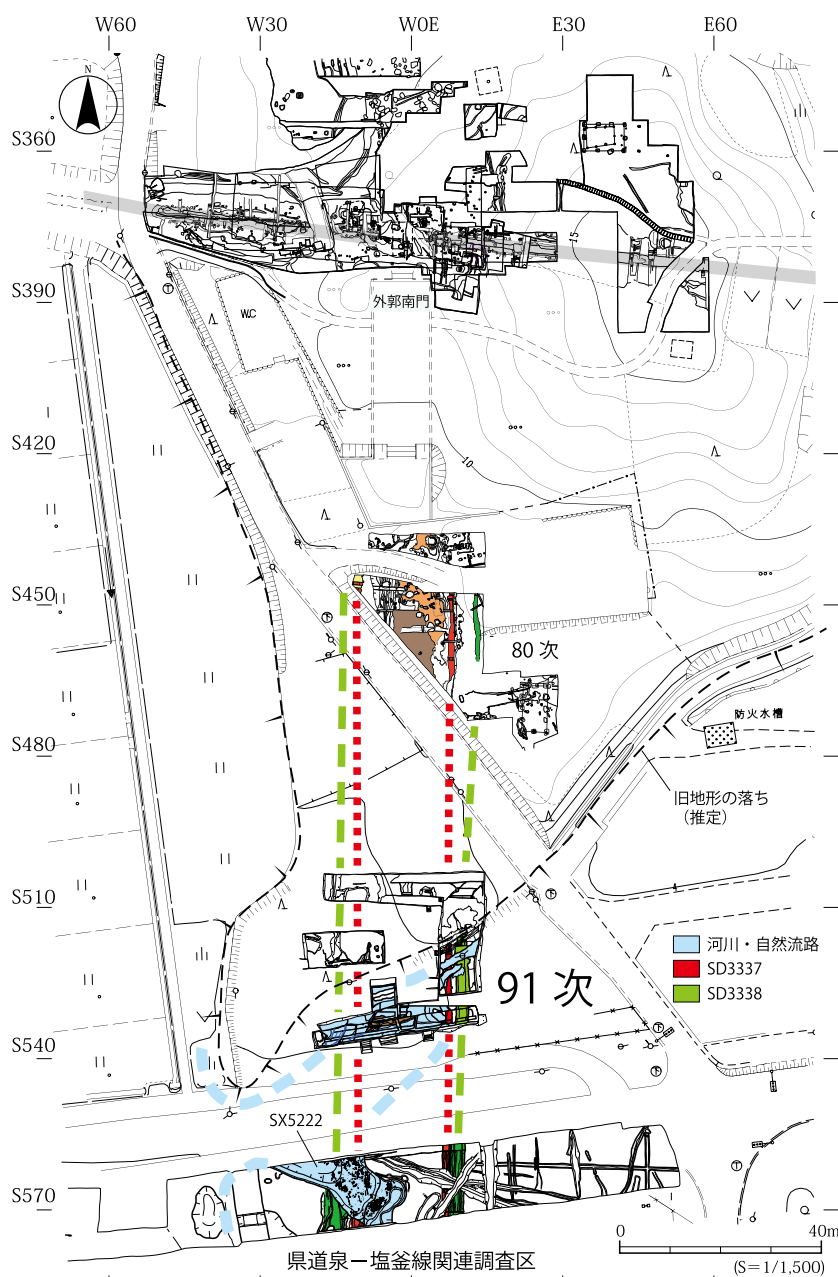
A 南北大路

SX3000 南北大路には、大路 A（SD3337 東側溝）、大路 B（SD3338 東側溝）、SX3341 整地層、SX3339・3340 路面堆積層がある。大路 A・B ともに西側溝が南北大路より新しい自然流路によって全て壊されているため、正確な西側溝の位置や路幅は不明であるが、自然流路の位置や隣接する県道泉-塩釜線の成果（宮城県教育委員会 2001）を勘案すると、大路 A の道幅は 18m 前後、大路 B の道幅は 24m 前後と考えられる（図版 24）。

大路 A SD3337 東側溝の排水は北から南に流れる。1・3・4 層は第Ⅲa・Ⅳa・Ⅴ層由来の地山ブロックで埋め戻されており、路面を拡幅するために埋め戻されたとみられる（図版 13）。なお、最下層には側溝機能時の流水を示す自然堆積層はみられない。その要因は、流水が円滑であった、側溝を繰り返し浚渫していた、埋め戻し前に側溝の堆積土をすべて掘りあげたなどが推測できるが、特定できなかった。また、2 層には水成堆積層の砂質シルトが観察できた。埋め戻し中に流水があったとみられる。

一方、縦断面に注目すると、側溝底面は、南の低地から北の丘陵裾に向かって緩やかに傾斜し、丘陵際にあたる北端では急に立ち上がることを確認した。すなわちこの東側溝は南の低地から北の丘陵頂部まで一定の勾配で上がるのではなく、丘陵際で段差がついていたと推察される。旧地形から推測すると、その高低差は0.6m以上であり、路面にも高低差があった(図版13・図版24)。路面の段差を解消し支障なく通行するためには、橋や階段を造ること、多量の盛土を丘陵裾にすりつけて傾斜を調整したことなどが考えられるが、詳細は不明である。今後の検討課題としたい。

大路B SD3338 東側溝の排水は北から南に流れる。側溝は少しずつ位置を違えてA～Dと3



図版24 第91次調査区と周辺の調査区

回改修されている（図版 13）。堆積土は全て自然堆積で、詳細にみると A-2・3 層、B-2・3 層、C-2 層など、A～C の下層は地山土が混入するが、上層と D 層は混入がほとんど認められない。この地山土の混入の有無は側溝内の流水状況を反映していると考えられる。すなわち地山土が混入する堆積土は、側溝の壁や底面の地山が流水によって削られ攪拌されて堆積したこと、側溝の壁や底面の地山が堆積土と一緒に浚渫された際に攪拌されたこと等の可能性が考えられる。一方、A～C の上層と D の堆積土は、地山土を含まない比較的均質な固い粘土であり、滞水していたことを示すとみられる。すなわち東側溝は開削または改修してしばらくは機能していたが、次第に埋没し機能が低下していったことを反映したものと考えられる。したがって大路 B の東側溝は、排水機能が低下するたびに 3 回改修された後、最終的に機能を維持されることなく埋没したと考えられる。

SX3341 整地層 土壙状もしくは溝状に残存した整地で 4 層確認した（図版 16・17）。整地層下の地山面の凹凸は、いわゆる「波板状凹凸面」と類似する特徴が認められた（近江 2006）。下層にあたる a・b は第Ⅲa 層由来の堆積土を含むシルト質粘土や粘土、上層にあたる c・d は第Ⅲb 層由来の堆積土を含む細砂や砂質シルトであり、後者は前者より新しい。つまり丘陵際に分布する比較的固い第Ⅲa 層由来の整地土上に、沖積地に分布する第Ⅲb 層由来の比較的柔らかい整地土が重なる。平面検出の範囲や重複がわずかであるため詳細は不明であるが、路面を構築する際に下部は固い土、上部は柔らかい土で整地したという工程差か、路面を構築する際には固い土、構築後の補修には柔らかい土で整地したという時間差のいずれかであろう。

SX3339・3340 路面堆積層 SX3339 路面堆積層は SX3341 整地層と第Ⅲb 層を覆って堆積した黄褐・黒褐色の砂質シルト・砂主体の水成堆積層、SX3340 路面堆積層は第Ⅲb 層を覆って堆積した暗オリーブ褐色・黄褐色の砂質シルト・砂主体の水成堆積層である（図版 16・17）。いずれも側溝との重複関係や堆積状況からは、大路 A・B のどちらに属するかは把握できなかった。しかし、水成堆積層が 4 層確認できることから、しばしば路面を覆うほどの水流に付近が襲われていたことがわかる。なお、路面構築時の補強痕跡や当時の通行面とみなせるような硬化面は認められなかった。この水成堆積層や南北大路以後の自然流路等により削平されたと考えられる。

B 自然流路

南門が立地する北東から南西に延びる丘陵の縁辺部を北東から南西及び北から南に流れる。重複関係と変遷については図版 23 の通りである。10 世紀前半頃以降の SX3343 自然流路跡は東から西へ流れる。県道泉-塩釜線の調査でみつかった古代の砂押川とされる 9 世紀～10 世紀中葉頃の SD5161B・5055 河川跡または 10 世紀中葉以降の SD5161B・5055 河川跡へ流れ込むとみられる（宮城県教育委員会 2001）。また、11 世紀後半頃以降の SX3356 自然流路跡は、北東から南西に流れる。先述したように、この流路跡は隣接する県道泉-塩釜線の調査で検出した中世の SX5222 河岸跡の埋没土（1 層）と類似するので、これに流れ込むとみられる（図版 24）。さらにこれより新しい中世以降の流路跡も、北東から南西及び北から南へと流れる。付近に中世以降の砂押川の流路が想定されることから、そこへ流れ込んでいたとみられるが、詳細は不明である。

(3) 南北大路について

①南北大路と政庁南大路の概要

南北大路と政庁南大路について今回の調査を含め9地点の調査例を取り上げて検討する(図版25)。これまでの南北大路の調査成果として、多賀城外郭南門から政庁中軸線の延長上を南に延びる城外最大の路幅を有す道路であること、外郭南門の約540m南の地点から西へ延びる東西大路とともに多賀城の南西部を方格状に区割りする基準となる道路であること、東西大路との交差点から南には延びないこと、大別2時期の変遷があり路幅が約18mから23~27mに拡幅されたことなどが挙げられる(多賀城市教育委員会1998・2004、宮城県教育委員会2001、鈴木2006)。

変遷と年代について、①拡幅前を8世紀中葉頃~8世紀末の政庁第Ⅱ期、拡幅後を8世紀末~10世紀後葉とし、上限を第Ⅲ期もしくは第Ⅲ-2期とする説(『年報2008』、宮城県教育委員会2001、鈴木2010、村松2013)、②拡幅前を8世紀後葉頃の第Ⅲ-2期、拡幅後を9世紀前葉~10世紀後葉頃とする説(桑原2000、多賀城市教育委員会2003)が示されているが、ともに定説に至っていない。

このうち『年報2008』では外郭南門跡(SB201A・B)より南を検討し、拡幅前の南北大路の特徴として、(ア)各地点の路心はほぼ一直線に結ばれること、(イ)その方向は政庁中軸線に対し北で東に振れていること、(ウ)路心は、外郭南門跡(SB201A)の付近では政庁中軸線に近いが、南に行くほど政庁中軸線から離れていくこと、(エ)SB201Aでは政庁中軸線の0.3m前後西を路心が通るとみられること、(オ)SD2733が東側溝にあたることを挙げる。このうち、(エ)については『外郭Ⅰ』により第Ⅰ・Ⅱ期の外郭南門跡の位置や構造、年代が明らかとなり、SB201Aが政庁中軸線から0.7m西にずれること、(オ)のSD2733はそのSB201Aの造営段階で整備された可能性が高いことが判明している。とりわけ第Ⅰ・Ⅱ期の南門の位置が確定し、第Ⅰ・Ⅱ期で道路の起点が異なることが明らかとなったことは、南北大路を検討する上で重要な成果である。そこで第Ⅰ期外郭南門跡(SB2776)より南について、道路の設計や施工状況を検討してみたい。

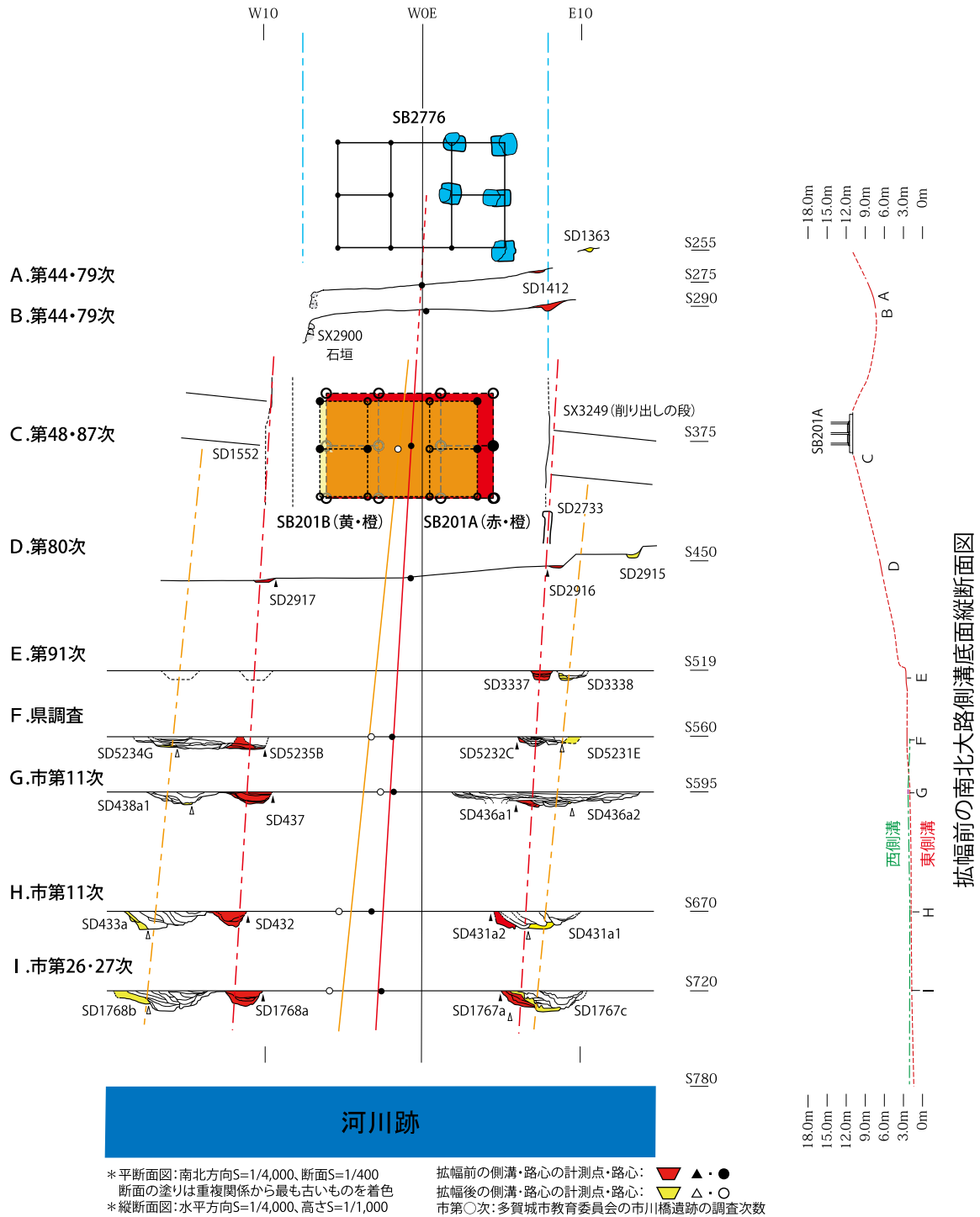
②分析の方法

今回確認したSX3000南北大路の路面と東側溝の位置や方向、規模、堆積状況、変遷は過去の他地点での調査例と同様の特徴が認められた。ただし、西側溝が残存していなかったこと、路面と側溝との明確な組み合わせを把握できなかったこと、遺物がほとんど出土しなかったことから、その構造や変遷の詳細を把握することができなかった。そこで、本調査地点を含めた過去の調査地点をA~I地点として断面あるいは平面により、主に『年報2008』で注目した、城外南大路・南北大路、外郭南門とその付属施設、区画施設の位置や傾きの相互関係を分析することで、南北大路の設計やその施工状況、年代等を明らかにすることを試みたい(図版25)(註1・2)。なお、最南端については、I地点との間に河川をはさむことや、その浸食により東側溝がほとんど確認されていないことから除外し(『年報2008』)、河川から北のA~I地点を対象とする(註3)。

③拡幅前の南北大路

拡幅前の大路の特徴

- 【東境】 (i) A～C地点までほぼ直線で結ばれ、政庁中軸線と平行する（青破線）。
 (ii) C～I地点まで直線で結ばれ、政庁中軸線に対し北で東に傾く（赤破線）。
 【西境】 (iii) A～C地点は直線で結ばれない。



図版25 外郭南門と南北大路模式図

(iv) C～I 地点まで直線で結ばれ、政庁中軸線に対し北で東に傾く（赤破線）。

【東西の境の傾き】

(v) 政庁中軸線に対し北で東に $0.32\sim 0.5^\circ$ の傾きにおさまり、C～I 地点までほぼ平行する。

【中軸線と路心】

(vi) A～C 地点の中軸線はほぼ政庁中軸線とほぼ同じで、路心はほぼその線上にある（『外郭 I 』）。

(vii) C～I 地点の中軸線は政庁中軸線に対し北で東に $0.32\sim 0.5^\circ$ 傾く。路心はほぼその線上にある（赤実線）。

【路幅】(viii) A～B 地点で約 14m（『外郭 I 』）、C～I で約 18m と路幅が異なる（註 4）。

【路線内の地形】

(ix) C 地点を境に A～C 地点は北斜面と沢、C～I 地点は南斜面と沖積低地となっており、傾斜の方向が異なる。

【側溝底面の傾斜】

(x) 東西の側溝は C 地点を境に北と南で傾斜の方向が異なる。

(xi) E 地点より南では、東側溝が E 地点から I 地点まで下がっていくのに対し、西側溝では G 地点を境に北と南へ下がる傾斜となる。

(i)～(x) から、南北大路は C 地点を境に道路の傾き、路心、路幅、旧地形、東側溝底面の傾斜方向などが異なっており、A～C 地点と C～I 地点で設計や施工方法の違いが反映されている可能性が高いことから、両地点の特徴をさらに詳しくみてみたい。

A～C 地点の検討 SB2776 門跡は桁行方向を政庁中軸線と直行すること、その線上に中心を置くこと、A～B で約 14m であった路幅が C で約 17.8m となること（『外郭 I 』）（註 5）から、A～C 地点は政庁中軸線を中心とした路幅約 14m（48 小尺：8 歩）（註 6）の直線道路として設計され、施工の際に東側は設計通りに施工されたが、西側は何らかの理由により、一定の路幅で施工されなかったと考えられる（註 7）。また東側溝の排水については (x) を詳細にみると、標高の高い A・C 地点から低い B 地点へ集めるよう設計・施工された。

C～I 地点の検討 先述の (ii)・(iv)・(v)・(vii)・(viii) から、C～I 地点は北で東に $0.32\sim 0.5^\circ$ 傾く道路の中軸線を中心とした路幅約 18m（60 小尺：10 歩）の直線道路として設計・施工されたと考えられる。また排水について、(x) から、東側溝は標高の高い C 地点から低い I 地点を流れる河川、(xi) から西側溝は標高の高い G 地点から低い F 地点を流れる河川へ集めるよう設計・施工された。

両区間の共通点と相違点 以上より、両区間の共通点と相違点は以下のように整理できる。

【共通点】

- ・道路の中軸線上にほぼ路心がある直線道路として設計された。
- ・排水を高地から低地へ集めるよう設計・施工された。

【相違点】

- ・路幅は一部を除いてA～C地点では約14m、C～I地点では約18mで設計・施工された。
- ・道路の中軸線について、A～C地点は政庁中軸線とほぼ同じであるが、C～I地点は北で東に $0.32\sim 0.5^\circ$ 傾く（註8）。
- ・路線内の地形はC地点を境に北と南で大きく異なる。

以上から、南北大路は各道路の中軸線上に路心が位置する直線道路として設計されたこと、高地から低地への円滑な排水処理を企図して設計されたことが明らかとなった。一方で、C地点を境に北と南で路線内の地形、路幅の設計、道路の中軸線が異なること、路幅が設計通りに施工されなかったことなどの相違点がみられた。この相違点は、地形の変化や地盤の強弱に応じた道路構造の違い、あるいは年代の違いのどちらかを反映したものであろう。

両区間の年代 『外郭Ⅰ』では、A～C地点を第Ⅰ～Ⅱ期とする（『外郭Ⅰ』）。そこで、A～I地点を巨視的にみると、C～I地点の道路の中軸線の北延長上にA・Bの路心とSB2776の中心が位置することが注目される。これは、道路構造が異なる両区間の路心をあわせることで、道路の統一性を高める企図があったことを示すと考えられる。すなわちA～I地点まで第Ⅰ期に整備されたと考えられる。

C～I地点は、続く第Ⅱ期に整備された可能性も否定できない。C地点のSD2733東側溝が、SB201Aの造営段階で整備されたことを踏まえると（『外郭Ⅰ』）、この場合、南北大路が高い荘厳性を示す施設の1つとして、外郭南門や築地塀と一緒に整備されたと考えられる（註9）。

ここではC～I地点の年代を特定するまでには至らなかったが、両説のいずれを採用にしても、C～I地点の整備年代は第Ⅱ期SB201Aの造営段階かそれ以前となることを指摘しておきたい。

④ 拡幅後の南北大路

拡幅後の大路の特徴 道路境である側溝の残存状況が悪く、各地点間の対応関係が確定できないことから、おおよその特徴について列挙する。

【東境】（i）E～I地点までほぼ直線で結ばれ、政庁中軸線に対し北で東に傾く（黄破線）。

【西境】（ii）F～Iまでほぼ直線で結ばれ、政庁中軸線に対し北で東に傾く（黄破線）。

【東西の境の傾き】

（iii）東へ傾き、F～Iまでほぼ平行する。

【中軸線と路心】

（v）中軸線は北で東に傾く。路心について、F地点はほぼその線上にあるが、G地点は中軸線の東、H・I地点は中軸線の西に外れる。

【路幅】（vi）約24mである。

以上から、南北大路は、北で東へ傾く中軸線を中心とした、路幅約24m（80小尺：13歩2尺）の直線道路で設計されたと考えられる。ただし、中軸線の東と西に路心の位置が外れることから、施工後の道路は詳細にみると蛇行していたとみられる。これは、施工の際には、中軸線に路心の

位置をあわせることよりも、約 24m という路幅を確保する方が重視された結果と考えられる。

⑤**拡幅前の大路との共通点と相違点** 以上より、拡幅前と拡幅後の共通点と相違点は以下のよう
に整理できる。

【共通点】

- ・北で東へ傾く中軸線を中心とした直線道路として設計された。

【相違点】

- ・拡幅後の道路は拡幅前よりも東に傾く。
- ・道路の線形について、拡幅前の道路は直線であるが、拡幅後の道路は場所によりわずかに蛇行していた。
- ・路幅は拡幅前が約 18m、拡幅後は約 24m である。

以上から、拡幅前と拡幅後の共通点として、北で東へ傾く中軸線を中心とした直線道路として設計されたこと、相違点として、道路の傾き、路幅、道路の線形が異なることが明らかとなった。これらの相違点は、拡幅前と拡幅後で道路の設計基準や施工条件が違うことを示している（註10）。その違いは、道路の西側への拡幅が外郭南門の変遷（SB201 A→SB201 B）における中心の移動と一致することから、それらが連動して施工される中で生じた可能性も考えられる（『年報 2008』（註 11））。

拡幅年代は、上限を第Ⅲ-2 期とする（『年報 2008』）。

（4）まとめ

本調査では SX3000 南北大路跡の東側溝 SD3337・3338、SX3341 整地層、SX3339・3340 路面堆積層を発見した。そして、過去の調査例とあわせて検討することで、南北大路の設計基準、施工状況、変遷、存続年代についてもより明確にすることができた。

- ① 南北大路の東側溝は拡幅前と拡幅後で、都合 4 回の改修が行われた。そして、拡幅前の東側溝は路面を拡幅するために埋め戻されたとみられること、拡幅後の東側溝は土砂がたまり排水機能が低下するたびに 3 回改修された後、最終的に機能を維持されることなく放棄され、埋没したことを確認した。また、拡幅前の東側溝に段差があることを確認し、丘陵上と沖積地との間で路面に高低差があったことが明らかとなった。
- ② 南北大路の路面について、下層は第Ⅲa層由来の固い土、上層は第Ⅲb層由来の軟らかい土で整地されていた。これは、路面を構築する際に下部は固い土、上部は軟らかい土で整地したこと、あるいは路面を構築する際には固い土、構築後の補修には軟らかい土で整地し

たことを反映したものとみられた。また、路面上にはたびたび流水があり、路面は浸食を受けていたと考えられた。

- ③ 南北大路は拡幅前と拡幅後の2時期の変遷があり、拡幅前の年代は、政庁第Ⅱ期の外郭南門の造営段階かそれ以前、拡幅年代は第Ⅲ-2期が上限と考えられた。また、廃絶年代は10世紀前半から後半以降で、10世紀後葉には廃絶していたとする県道泉一塩釜線の調査と矛盾しない。
- ④ 南北大路は北で東へ傾く中軸線を中心とした直線道路として設計された。また拡幅前と拡幅後で、道路の傾き、路幅、線形が異なっていた。この相違点は、拡幅前と拡幅後で道路の設計基準や施工条件が異なっていたことを示すと考えられた。
- ⑤ 南北大路は、田屋場地区の丘陵頂部を境とした北と南とで、設計や施工条件が異なっていた。その違いは、地形の変化や地盤の強弱に応じた道路構造の違いか、年代の違いのどちらかを反映したものと考えられた。

註

註1 図版 25 の外郭南門跡と南北大路模式図の作成にあたっては、A～I 地点の各平面図のXY座標を世界測地系に変換してそれぞれ合成し、その平面図を多賀城座標に置き換えた後、A～I 地点の各断面図を作図の位置に配置した。また、拡幅前の南北大路側溝底面縦断面図については、A～I 地点の各断面図から底面の標高を計測して作図した。そして各地点間を結ぶにあたっては、地山上面の標高を参考とした。

なお今回の調査地点を除く各地点の図面は、すべて震災以前の作図であるが、東日本大震災により、各基準点の標高値が0.31m前後沈下していることが判明している(『年報 2012』)。そこで、震災前の標高値にあわせるため、今回の調査の標高値は30cm加えた。

註2 村松はSD431a2を人為的な埋土とみて拡幅前の東側溝と考える(村松 2013: 註22)。SD3337の堆積土とも類似しており、その説に従っておきたい。

註3 A～I 地点の側溝のほぼ中心、削り出しの段の上下端のほぼ中央、石垣の肩と裾のほぼ中央を「道路境」、道路境を南北に結んだ線のうち東を「東境」、西を「西境」、東境と西境と平行する中心線を「中軸線」とした。また、両境の東西距離を「路幅」、両境の路面側の両肩の東西距離の中心を「路心」とした。

註4 A～B地点の路幅は西境: SX2900 石垣上端と東境: SD1412 西肩間の距離、C～I 地点の路幅は、①西境: SD1552 溝の西肩およびD～I 地点の各側溝の底面の立ち上がりなどを結んだ線、②東境: SD2733 溝の中心と、D～I 地点の各側溝の底面立ち上がりなどを結んだ線とし、①と②の間の距離を計測した。

註5 SD1552の西肩とSX3249削り出しの段の上端の距離とした。

- 註6 鈴木は多賀城に関わる測地尺を、和銅六年改正の〔6小尺=1歩〕制を適用し、令小尺を〔1小尺=0.2957m〕とする。そして、拡幅前の道路幅を60小尺=10歩、拡幅後を80小尺=13歩2尺の計画に基づいて造営されたとする(鈴木2010)。
- 註7 B～C地点西側が設計通りに施工されなかった要因は、沢の入る低地にあたり、SX2900石垣を造る際に大規模な盛土造成が必要であったこと(『年報2008』)を援用すると、この盛土造成は西へと徐々に広がりながら、C地点が立地する丘陵にすりつけられ、最終的にC地点で約18m(SX3249削り出し上端とSD1552溝西肩でみると)の路幅になったとみられる。これは、SB2776門跡を起点と同じ路幅の直線道路が設計されたものの、施工の際に路幅が徐々に西に広がったことを示すのかもしれない。B～C地点の路面の取り付け方法については、A～B地点の西境であるSX2900石垣や上述した盛土造成の延伸範囲や方向、当時の地形の起伏を総合的に検討する必要がある。
- 註8 北で東に0.32～0.5°傾く要因について、第Ⅰ・Ⅱ期の政庁南門の中心は正殿の中軸線に一致せず、西へ約0.3mずれるとし、これを施工誤差とする見解が目される(『政庁編』)。また、その軸線は東・西南門前殿の桁行柱筋に直交することが指摘されており、南門前殿は正殿、脇殿、南門などの構築に引き続きこれらと異なる正殿心と南門心を結ぶ線を南北方向の基準としてその位置が決定された可能性が高いとする(『政庁編』)。すなわち施工誤差を残したまま、それをもとに南門前殿は構築されたと考えられる。その軸線は北で東に0.25°前後傾くとみられ、南門前殿と同様に南北大路も、この施工誤差をもとに造営されたのかもしれない。政庁南大路も含め、今後詳細な検討が必要であろう。
- 註9 SB201Aの構築工程の途中で、門の造営基準が政庁中軸線上から道路の中心へと設計変更されたことが明らかとされていることを踏まえると(『外郭Ⅰ』)、C～I地点と設計変更後の門の設計は一体であったとみられる。
- 註10 城内南大路について『外郭Ⅰ』によると、第Ⅰ期の外郭南門SB2776門跡から南へ約120mの場所に第Ⅱ期の外郭南門SB201Aと築地塀が移転されたことによって、A～C地点は政庁中軸線を基準とした路幅約24m(80小尺：13歩2尺)の城内の道路となる(『年報1983・1987・1988・2008』『外郭Ⅰ』)。ここで東側溝SD1363の位置と方向をみると、南北大路東側溝の北延長から大きく西に外れること、方向は政庁中軸線から北で西に傾くことが注目される。すなわち、城内南大路と南北大路は一直線に結ばれないことから、両者の設計が一体ではなかった可能性が高い。年代については政庁第Ⅲ期以降に対応する(『年報1983・1987・1988・2008』『外郭Ⅰ』)。
- 註11 『外郭Ⅰ』により『年報2008』の時点よりもSB201Bの中心がSB201Aよりもさらに西にずれ、政庁中軸線から約1.5m西となることが明らかになっているが、西にずれた距離の数値が修正されたのみで、結論に影響はない。

引用文献

- 近江俊秀 2006『古代国家と道路』青木書店
- 桑原滋郎 2000「古代都市多賀城」における「多賀城南門」と「南北大路」『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 鈴木孝行 2006「多賀城外の方格地割」『第32回古代城柵官衙遺跡検討会—資料集—』
- 鈴木琢郎 2010「多賀城の大路造営」『福大史学』第81号 福島大学史学会
- 多賀城市教育委員会 2003『市川橋遺跡・城南土地区画整理事業に係わる発掘調査報告—II—』
多賀城市文化財調査報告書第70集
- 多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡・城南土地区画整理事業に係わる発掘調査報告—III—』
多賀城市文化財調査報告書第75集
- 多賀城市教育委員会 1998『市川橋遺跡—第11次調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第75集
- 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
- 古川一明 2007「多賀城跡の11世紀～12世紀の土器について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報2006』
- 宮城県教育委員会 2001『市川橋遺跡の調査—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第184集
- 村松稔 2013「多賀城城外における南北大路の創建および拡張時期について」『福大史学』第82号 福島大学史学会